

## 第Ⅲ部 参加者感想

## 震動！感動！万感こもこも至る

羅萃萃

「南京を思い起こす 2011」国際セミナーが終わってから二週間の内に感想を送ってほしいと呼びかけられましたが、そろそろ二週になるのに、その感想をなかなかまとめられず困っていました。

実は、今まで、その四日間の体験を一日も思わない日はないと言ってもいいように毎日考えたり、学生と話しあったりしてきました。それなのに、コンピューターを開けて打とうとしたら、万感が胸につまり書きたいことがいっぱい湧いてきて、どこから書き出したらいいか迷ってしまった挙句、コンピューターを閉めてしまったのです。

今日、出さなければならない日なので、思い切って思いついたことを書こうとコンピューターを開けたわけです。そして、セミナーの間、毎日ワークショップを終える前にアルマンド先生は締めくくりとしてみんなに自分の感想を一言言ってくださいとおっしゃいました。そこで、参加者のみなさんは一日の活動で感じたことを一言に絞って言いあいました。それらはすべて心から出た言葉でみんなの実感とも言えると思えました。それらの言葉を並べると、また、私自身の心情の変化図になったので、これから、その感想語を並べ、その順にしたがって感想文を書いていきたいと思えます。

期待、感動、心を痛め、理解、震動、感心、本音、国境越え、反省、信心という順です。

### 期待

2009年にアルマンド先生がファシリテーターされた HWH ワークショップに参加させていただき、よい体験をしました。それで、二回目の HWH ワークショップに来てくれないかと綾さんに頼まれた時、ワクワクしてとても期待していました。

というのは、前回の HWH ワークショップで、生まれて初めての体験をしたばかりでなく、中日友好の仕事に従事してから、初めて戦争被害者である立

場で、戦争加害者の立場である初対面の日本の方々、しかも、加害者と何らかのつながりのある日本の若者と、南京大虐殺という忌み深い話題について腹を割って話しあうことができたからです。

たった四日しかつきあっていなかったアルマンド、邦子、綾をはじめ、日本の若い方々のことが頭に焼きつき、思い出しては泣きたいほど懐かしくなったのです。

これは、とても不思議で大切な体験です。今ではもう二年たったが、その記憶はまだまだ鮮やかで、とてもみなさんと会いたいです。そういうわけで、今回の HWH ワークショップにとっても期待していたのです。

ただし、不安もややありました。前回の HWH ワークショップで中日両方の参加者は、互いに悲しみ、苦しみを十分に分かち合い、誤解を解消し、わりと深く理解し合えたように思われるので、今回のワークショップで前回ほど感動させられることがなく、互いにもっと深く話しあえることがなくなったら、かえって、互いに何を話しあったらいいかわからなくなるのではないかという不安でした。

それにしても、中国側の人にしては、やはり釈然としない話題がまだあると思うが、それらについて、本当に日本の方々となんの気遣うことなく深く話しあえるのだろうか、期待、不安の混じった気持ちで「南京を思い起こす 2011」国際セミナーの開幕を待っていました。

## 感動

実は、私の感動は初日から始まりました。邦子先生の開幕の言い出しの一言で、今回のワークショップは感動の雰囲気が始まり、少し抱いていた不安もすっかり拭き払われました。そして、すぐに、参加者の皆さんに話しかけたい衝動も押え切れないほど湧いてきました。邦子のメッセージは参加者の胸を打ったと思います

初日の HWH ワークショップが始まる前に、邦子先生は「今回のイベントは政府の援助金をもらい、ホロコースト生存者二世のアルマンド先生にファシリテータをしていただいて実行できたものです。」とおっしゃいました。邦子先生のお言葉を聞くと目頭が熱くなりました。一つは、このイベントの用意でかな

り疲れたように見えた邦子、綾をはじめ、多くの日本友人は真心を南京の人々に見せようと懸命に政府や大学に働きかけ、援助を求め、今日の平和の道に辿り付いたことを痛感したこともあるし、右翼暴力団の銃弾でなくなった長崎前市長伊藤一長のこと、ずっと右翼に脅かされてきている笠原十九司先生のことを連想したのです。

もう一つは、前回、アルマンド先生はドラマセラピーの心理教授として HWH ワークショップを開発し、多くのドラマセラピーを作りました。そして、戦争被害者と加害者の間に来てこの療法がトラウマを癒す効果がどれほどかを測るために、このイベントをファシリテートしたのだと思ったのです。先生はえらい国際主義者で、ご研究目的は素晴らしいと思いました。ところが、意外なことに、アルマンド先生のご両親もホロコースト生存者です。先生は個人の恨みを抑え、如何にしてマイナスのトラウマをプラスの平和力に置き換え、加害者の子孫と仲良くしていく道を研究しています。さらに、世界平和のために各国を走りまわり、その研究成果の実用化を試みています。それで、先生への親近感と尊敬がより一層まりましたので、感動を覚えたのです。

三つ目は、日本からのメンバーには、女の子の K さん、男性の M 教授をはじめ、馴染みの顔も何人もみえた上に、新しい顔も多く増えました。それに、だれもかれも、熱心な目付きで中国側のみなさんを見ていましたからです。そうして、まだ、何もコミュニケーションをしていなかったのに、双方の心がすでに通じあっているように思われ、その場に立つだけで、胸が打たれるような感動を感じさせられたのです。

## 心痛め

それから、アルマンド先生の指示で、みんなは自己紹介の形で「私は〇〇で、中国人（日本人）です」とみんなの前で声を出し、自分のアイデンティティを認識させるステップに入りました。

思いがけないことは、中国側のみなさんは「私は中国人です」といったとき、殆ど誇りを感じられ、それに対して、日本人の多くは「私は日本人です」といったときに、恥ずかしいか、堂々と言えないという感じがしたと言っていました。このことから、日本側のみなさんの心苦しさを痛感せずにはいられな

かったのです。特に、いままで、成人まで、歴史のことについて何もわからずに幸せに育ってきた若者は、日本人であることを悔しいと言ったときの目つきから伝わってきたのは、戸惑、不安、哀願、淋しさというもので、それは、中国側の若者の心をキリキリと痛めたように思われます。

さらに、考えられないことは、香港のHさんが堂々と「私は中国人です」といえなかったことです。彼は自分が中国人なのに、入国手続きをするときに外国人の列に並べさせられたことに、すごく淋しくて悔しい思いをしたと訴えました。また、彼は、せめて戦争被害者の重荷を背負ってもいい、堂々たる中国人になりたい、今の身分ではとても困っていると二重身分の苦しさを吐きました。さらに、彼は、在席のみなさんがみな自分の祖国のためにとっているのを見てとても羨ましい。自分には貢献したいと思う貢献先が朦朧してとても戸惑っていると言いました。

実は今日の香港は一国両制の立場にさせられたことも侵略戦争のせいでしょう。

また、Lさんは韓国人でありながら大学までずっと日本人の苗字を使い、日本人の身分で生活してきたことにも息苦しく感じてきたと訴えました。堂々と韓国の名前を使うようになったのは、極最近のことだそうです。

HさんとLさんのことを聞いてトラウマはいろいろな形で各国の若者の心にこびり付いていることを痛感して心を痛めました。

## 理解

その後、みんなは戦争に関わりのある、戦争への関心を寄せさせる物を出し合いながら、それぞれ、持参した物についての話を分かち合いました。その話はどれもこれも、胸を痛める話ばかりだと思います。

まず、アルマンド先生は、ホロコースでなくなった仲睦まじい大家族の写真、ホロコース生存者であるご両親の写真をみんなに見せながら紹介しました。その時、その場にいた人々はみんな、静かに聞きながら、目頭が熱くなったと思われれます。

アルマンド先生に継いでみなさんは、真剣な顔をして、次々と持ってきたものをみなさんにみせながら紹介しました。

南京大虐殺の惨めな様子をありありと写った写真集、  
戦争について深く考えさせたアイリスチャンの著作、  
貧困、暴力という戦争の源を連想させ、一度取られた財布、  
南京へ来ては戦争の残酷さを認識させられたハガキ、  
歴史に無関心な高校生に向かって、すごく怒った教科書訴訟案に命をかけた家永三郎の写真、  
いつも手をとっていっしょに散歩したやさしいおじいさんの元日本軍服姿の写真、  
朝鮮半島から日本に強制連行され、苦しい青春を過ごしたおじいさんおばあさんの写真、  
シベリアへ元ソ連軍に強制連行され過酷な労役されたことを子供の時から言い聞かされたおじいさんの元日本軍服姿の写真  
平和活動に熱心に参加している元軍人のおじいさんの影響で平和の絵を描いている子供  
などなど。

以上のアクションをしているうちに、その場にいる人々の心は、すでに国境を越え、互いに少しずつ近づいてくるように感じました。互いに見合う目付きもますます優しく、熱心になり、そして、みんなは隣に立っている人にみずから話しかけ、理解を求めるようになり、会場の雰囲気がだんだん仲睦じく親しくなってきたと思われます。

## 震動

四日の間、毎日のように、中日両側のみなさんの腹の底から発した息苦しい叫び声に震動され、胸が苦しめられ、打たれました。

二日目、互いに許しを求めるステップが終わってから、若いKさんが泣きながら「もし、私のおじいさんがあなたのおじいさんを殺したら、私のおじいさんがあなたのおばあさんを強姦したら、今の私はどうしたらいいかわからない、わからない！」と叫びました。

彼女の腹の底から発した辛い泣き声は、私の胸を痛めて、いまでも、頭に強く響いています。なんと勇気のある女の子でしょう。彼女は誰も考えているが、

だれも素直に中国の若者に問いかけられない問題を、みんなの前で出しました。

これは彼女が南京事件を自分自身のことと結びつけて真剣に考えていることの証明だと思います。彼女に対して、日本の右翼や一部の政治家は南京事件と無関係のように懸命に装い、戦争被害者に無関心どころか、苦痛のどん底に陥っている被害者のことを偽物だとさえ皮肉を言っています。若いKさんと比べて、何とつまらないでしょう。私は本当に彼女の勇気と正義に胸が打たれました。そして、勇気を持って南京に来ている日本の若者に、歴史の真実に直面し、あらゆる圧力を退け、世界平和の道を探す学者のみなさんに敬意を表したいのです。

また、ある日本の女の子に元日本軍であるおじいさんのことをどう思いますかと、聞いたら、彼女はわからない、分からないと連発して、そして、覚えているのはただ、毎日、私の手を取って一緒に散歩していたおじいさんだけですと泣きくずれました。南京に来るまでに、おじいさん世代のことを全然わからなかったが、南京に来てから、大虐殺のことは見たり聞いたりしてびっくり仰天、とても、信じがたくて、受け入れることができなかつたようです。

おそらく、多くの日本の若者は彼女と同じ気持ちでしょう。あんなに愛してくれた優しいおじいさんは、もし、大虐殺をした鬼のような人間だったら、考えるだけでもぞっとするでしょう。彼女の涙は会場のみなさんの胸をひどく痛めたと思われます。また、子供の時からおじいさんからずっと、シベリアでソ連軍に過酷な労役をさせられたことしか聞かされていなかった男の子の目つきは、呆然で、戸惑い、とても現実を受け入れられないように見えました。

中国の若者だけでなくアジアの人々が知り尽くした元日本軍の罪については、元日本軍の二世三世が全然知らないということは、どのような結果をもたらすのか、特に三世の若者は将来どのようにして他の国々と国際関係を結べるのでしょうか。

## 感心

四日間の中に、毎日ショックや心の痛さを感じただけではなく、常に感心の気持ちもよく湧いてきました。アルマンド先生をはじめ、日本の若者の勇気と誠意、さらに、学者の皆様の正義と真心、歴史史実を素直に認識する態度に感

心せずにはられませんでした。

中日対話のステップに入った時に、Mさんは、中国人の立場に立って日本側にはずばりと詰問しました。「あんな残酷な南京大虐殺をして我々被害者をこんなにくるしめたのに、いままで、誰も我々の悲しさ、苦しさを聞いてくれるものがない。われわれの死ぬのを待っているのではないか。我々が死んだら証明できる証拠もなくなると思っているのだろう。」彼の怒鳴りは会場の人々を驚かしました。

実は、Mさんはアメリカにいたとき、ある日、数千人の中国人の日本軍暴行非難の集会に出て、中国語がわからないが、会場にわき上がって押え切れない怒りの怒濤に圧迫され、息苦しくなっていたまらなくなった経験がありました。彼の苦痛であり怒りに満ちた顔を見て、何と良知で、正義に満ちた方かと、心から感心、敬意が湧いてきました。

その他に、感心せずにはられない人はプレイバックシアターを演じてもらった俳優のみなさん。彼らの素晴らしい演技だけではなく、当事者の経験をしたように演じたのです。実は、当事者と心が通じないと、彼らの気持ちを自分の身をもって感じ無いと、演技がどんなに優れても、当事者の戦争話題に付き纏った苦痛、戸惑、呆然、葛藤、辛さとショック、また、平和への期待などの複雑な気持ちを、体の動きでよく表現できないと思います。彼らの素晴らしいシアターで、国籍の異なった人々は、当事者の苦しさを分かちあうことができ、当事者の辛い思いを最大限に軽くさせたように思われます。当事者の表情から見れば、シアター前後の気持ちが違ったと思います。前は暗い、その後は明るくなったように見えました。プレイバックシアターを演じた俳優のみなさんは、当事者の戦争への怒り、大虐殺遭難者への哀悼、戦争の被害者への思いやり、平和への期待などの心理活動を心を込めた演技で、ありのまま表現してくれまして、南京の人として、心から感謝したいと思います。

また、感心せずにはられない人は、ワークショップに参加してきた日本の若い女の子のみなさんです。イメージから言えば、日本の若者は政治や国際情勢にあまり感心を寄せない、とくに女の子です。しかしながら、彼女達が示してくれたイメージは正義、聡明、良知というものです。

二人のグループで尻取りの形で物語を話しあうエクササイズで、私はSさん



とペアになって物語を語り続けました。終りとして、私は今までの不愉快を日本の言葉でいうように水に流しましょうと言ったら、彼女はとても真剣な顔をして、「過去のことは本当に忘れようとしたら忘れられますか、歴史のことを水に流したら本当に気が済むのですか、私はそうは思いませんよ。」実は、悪いことを水に流そうというのは日本の独特の文化だと、多くの日本人、また、日本に長く住んでいる一部の中国人がよく言う言葉です。それに、そういう文化特質があるからこそ、日本の第二次大戦で犯した罪を追求してもしようがないと主張している人がかなりいるようです。それに対して、実は、Sさんのような思いをしている日本人も多いと思います。

また、最後の日に、ワークショップの参加者は、講壇に立ててある木の枝に、感想の書いた紙切れをかける時に、自分の手を引いて散歩してくれたお爺さんのある女の子が、ずっと黙々と講壇の後ろの冷たくて硬い床に跪き、みなさんの手伝いをしてくれました。彼女はすでに自分の出来る限りの行動で、侵略戦争反省、戦争阻止、平和追求の活動を始めたと思われる。彼女たちは本当に尊敬すべき良知で正義である女の子です。

## 真心

参加者自分自身の表現アーツで自分の体験を演じるステップで、アルマンド先生の指示で、私は成長期に自分の意識の形成に強い影響を与えた人物を取り上げ、みなさんに演じてもらいました。私は邦子を私の母に、韓国のLさんを子供時代の私に、そして、記憶に強く残っている光景をみなさんに演じてもらいました。

邦子は優しくてゆっくりと母がよく歌った日本の童謡を歌っていました。あの子供の時によく聞いた歌声を聞くと、涙がぼろぼろと零れてしまいました。「夕焼け小焼けて日が暮れて山のお寺の鐘が鳴る、お手てつないで皆帰る、カラスも一緒に帰りましょう。」邦子の歌声はあんまりに母の歌声に似ていたので、子供の時の母を思い出し抑え切れずに涙を流してしまったのです。似ていたのは、あの悠然とする響きのある優しい歌い声です。邦子の歌声を聞いて、子供の時に、母が歌いながら日本での生活を懐かしそうに思い出しながら優しく話してくれたことを思い出しました。邦子はまるで、私の母のことをよく知って

いるように子供の私に話しかけました。彼女の姿を見て、昔の母の面影がありありと浮かんできて本当に驚きました。

あとで分かったのですが、邦子がまるで経験したように演じてくださったのは、実は、邦子が幼い時、お母さんが昔のことについていろいろな辛い話を教えてくれたからだそうです。いろいろな辛い目に遭わされた邦子のお母さんは、出来る限りの力で幼い邦子を庇っていました。そして、邦子に成年になってから、弱い人を助けてあげるようにと、ずっと言っていたそうです。邦子の話によれば、私と邦子はまるで双子のようです。邦子の話を聞くと彼女と心が通じあうように感じられました。

母は日本の神戸生まれ神戸育ちです。日本とは切っても切れないつながりがあります。しかし、戦争中、日本にいた中国人はシナ人とかチャンコロと軽視されたばかりでなく、南京をはじめ中国戦線で日本が勝った時は、神戸中華同文学校の学生だった母は、他の中国人と街へ祝いに借り出されました。差別されてとても嫌な悔しい思いをした十七歳の母は、一人で中国に帰ったのです。

今の母は、白髪で弱々しくなったが、年になるほど、日本の食べ物、神戸の風景がとても懐かしくなり、淋しそうに見え、見る人の胸を痛めます。しかしながら、母は日本から帰国した華僑という身分が原因で、中国の特別な時期に、私は華僑二世として子供時代に、公私両方から、差別され、不公平に扱われました。周りの中国人は本当の日本鬼に仇討ちができないかわりに、華僑の子供を小日本鬼として恨み、勉強の好きな子供に平等的進学チャンスも与えないようにしたのです。無力を感じた母は唯一できることは、傷つけないように出来る限り子供を庇っていました。

邦子は頭に刻んだ記憶で私の子供時代の母を演じていたおかげで、母と同じような日本から帰国した華僑の人々の辛い立場を理解し、また、彼女たちは、自分のことで巻き込まれた子供が被害を受けたことを見て、とても辛い思いをしたが、理解してくれる人がいない辛さを知るようになりました。それで、トラウマというのは戦後七十年の今も、まだまだ、多くの人々を苦しめていることをしみじみ感じました。他の役を演じていただいたみなさんも経験したことがないというものの、真心をもって四五十年前の情景を再現でき、本当に感激せずにはいられなかったのです。

## 反省

あの四日間のワークショップを振り返ってみると、心得たことが多過ぎてとてもよくまとめられないが、ここで、反省させられたことをまとめたいと思います。最後の晩の会議で、私は、みんなの疲れた顔を見ながらこう言いました。「四日の間に、みんなからよく聞いた言葉は無力だという言葉です。中国語に訳すと仕方がないという意味が適当だと思います。アルマンド先生は努力を尽くして、ドラマセラビのワークショップをしました。また、平和を愛するみなさんは自費ではるばるアメリカ、日本、香港、広州から南京に来られて、HWHに参加し、そして、素晴らしい成果を遂げましたが、ひょっとすると、ある国の運命を握る政治家の一言で、みなさんのいままでの努力は、一瞬のうちに水に流されてしまうかも知れません。私たちのささやかな力は何の役に立つでしょうか。むしろ、政治家にこのHWHに来て、経験していただいたほうが効果があがると思います。」

会議後、私は張連紅先生に「さっきの話はしては駄目だと今後悔していますが、本音ですよ。」と言いました。しかし、張先生の一言で、私は反省しました。彼は「民衆の力を侮ってはいけないよ。」と繰り返して話しました。その時、「一点の火花も燃え上がっていく炎になれる」という毛沢東の言葉を思い出した。確かに、アルマンド先生がファシリテータしたHWHは一点の火花だと言えますが、いつの日にか、きっと平和の炎になれると確信します。

## 信心

四日間のHWH研究活動で見てきた平和を愛するみなさんの言行から、HWH研究活動にとっても信頼をもつようになりました。

まず、燕の磯にある南京大虐殺遭難者の記念石碑の前に、アルマンド先生をはじめ、韓国のLさん、広州のZさんと私四人は、抱き合って、泣き潰した日本の女の子を囲んで彼女を慰めました。とても不思議な場面でした。被害国の人々は、協力しあって加害国の子を慰めたという光景です。この光景こそ、国境を超えた最も深く理解し合い、思いやりのある、仲睦まじい友情を見せてくれたでしょう。また、今回のHWHで、日本の若者は心からの誠意と一生懸命努力する望ましい姿を見せました。

中国の若者が見せてくれた理解、寛容と思いやりの態度、また、留学生の翁さんと董さんの力を尽くした通訳ぶりも、感動すべきものです。私は通訳として、これから、このような仕事の通訳をする若者が出てきてくれてとても嬉しく感じました。さらに、中日の学者のみなさんも非常に客観的で、誠意を持つ研究態度もとても尊敬すべきものです。

最後に強く印象に残ったことは、最後の日の風景です。会場で、中日双方は自国の立場に立って、いままであまり口に出せなかった相手国への質疑をずばりと出してから、相変わず、互いに真心をもって抱き合ったり握手したりして平和のために協力しあって努力していこうと誓い合ったことです。その光景はその場にいた人々に、マイナスなトラウマをプラスな平和への力に置き換えることができるということに信頼を持たせてくれたと思います。

以上は今回の HWH で心得たもの一部です。

## 12

### 国際セミナー「南京を思い起こす 2011」 HWH による感想 (翻訳)

匿名

今回、「南京を思い起こす 2011」HWH ワークショップに参加させていただき、とてもありがたく思う。ワークから勉強になったものがたくさんあるが、とりわけ、プレイバックシアターという表現アーツに驚かされ、素晴らしいことだととても感心した。こういうワークは、今まで、経験したことがない、ユニークなものだと興味深く感じた。ドラマセラピーを通して、人々にコミュニケーションをよりいっそううまくさせることができる。特に、不愉快な歴史のトラウマをお互いにもつ異なる民族の人々を仲良くさせられそうだ。

このようなワークから、私自身も、いままでずっと心に潜んで言えなかった心情をじっくり味わうことができた。偏見をのぞけば、どんな難しい問題も解けないものはないのではないかと。コミュニケーションは難題解決の最善策だと思う。これは、わたしたち喜怒哀楽を持つ個人の問題解決策だけではなく、国

家間の相互理解にもなにより大切で必要だろう。これこそ理性的なやりかただと痛切に感じた。

10月5日－8日の間に、両国の参加者は話し合ったりして良い交流をした。言葉の障害があるとしても、表情と動きから相手の優しさや思いやりといった気持ちが深く感じられた。しかも、建前ではなく、真心の優しさと思いやりだ。これこそ、感動せずにはいられないところだと切に感じた。

わたしたちはアルマンド先生のご指導のもとに、我を忘れてHWHワークに熱中した。何の偏見も持たずに一緒にワークをしていると、此処で熱心にコミュニケーションをしている人々が、国籍をとわず、ただ人間として付き合っているのだと強く感じるようになった。普通の人間としてこのグループに溶け込んだとたん、なんと面白くて意義あるゲーム、なんと素晴らしい友人の方々だろうと興味深く見ていた。そして、みなさんとずっとずっといたいと思う。

ワークの時に、心に溜まったマイナスな気持ちを意のままに出すようにとアルマンドに言われた。ドラマが心にこびりついたトラウマを癒してくれるという。そうして、家族から、周りの人々から、たまってきた日本に関するトラウマを徹底的に吹き払ったように感じ、とてもすっきりした。

戦時中、日本は中国人にひどいことをしたと、ずっと思い続けてきた。これも否定できない事実だ。あの醜いおびただしい死骸、トラウマに心をひどく痛めている生存者たちは、誰も否定出来ない被害の証拠だ。とにかく、いたるところに、戦争で被害を受けた傷が残っている。子供の時、老人から、戦争被害体験をしょっちゅう聞かされていた。今の若者より、あの方々が若い時、生活がたいへん辛かったようだ。悲惨な時代においても彼らは、それでもあきらめずに、元気に前向きに生き抜いてきた。本当に感心せずにはいられない。先輩の方々が私に伝えてくれたのは、強さと寛容で、日本への恨みなど伝わってこなかったと思う。こうした先輩の精神こそ、私を喜んでこのワークに参加させ、それによって多くの大切な友人ができたと考えている。一日も早くみなさんと再び会いたいなあ。

最終の日に、南京の燕子磯で追悼式があげられた。その光景が心に強く焼き付いた。人々は虐殺遭難者の石碑の前に立って歴史への反省と懺悔をした。その時、日本の友人と記念碑の前に跪いて花を捧げた。その時に、国境を超えた

感じが強くて胸を打った。一万回頭を下げて、大したものではない。一番大切なことは心から、歴史の真実を知ろうという気持ちだとその時思った。これからの人生にこのような考えを活かして、歴史の悲劇を再び起こさないように努力していきたい。

友人と分かれる時に、いつも、名残惜しい気持ちがある。しかし、8日の日にその気持ちが特に強かった。ワークのメンバーとわかれて、寮に向かう途中、名残惜しさを覚えながら思った。日本のみなさんと知り合ったことで、これからの人生にもう一枚の新しい扉が開かれてくれたようだ。一緒に過ごした日々は本当に色々と教えてくれて良い勉強になった。

そして、心から理解万歳と声を出して叫びたかった。ここでいう理解とは、単に侵略、虐殺、災難、復讐への理解ではない。もし人間には、二種類の感情しかなかったら、何百万年の文明も伝えてくれないわけだ。此处で言う理解は、人間にある理解だ。人としての理知と感情があれば、あの歴史に起こった事をどうして理解することができないであろうか。そうでなければ、私たちが存在する意義もなくなる。我々は、これから何ができるのか、わたしたちははっきり分かっていると思う。

### 3

## 南京を思い出す 2011 10月5日－8日 (翻訳)

陳韻 (Sana)

セミナーの前、わたしが日中戦争・南京大虐殺と自分の関係を考えた時、浮かんできたのは、自分と戦争の距離は遠いということだった。思い出すのは尖閣諸島の主権問題やインターネットを通じて広まっている日本製品不買のスロガンや大震災による災難に対する皆さんの態度などだった。わたしはある国に対する態度や感情が国家関係の影響を受けること、日本で発生した事件に中立的に接することができないことに気づいた。私が携わっている弱者たちのためのサービスという仕事の価値観からすると、わたしは被害者の角度から共感するべきだと思った。しかし、皆さんが心から立腹しているのを感じたので、そ

の同情の気持ちを表現してはいけないと思った。南京大虐殺に直面するとき、わたしはどうしても脱け出せないものは、その事件のシンボルの意義だと思う。自分が中国人として、自分の同胞が体験した苦難と自分の国が蒙った恥辱に対して、「それは自分と関係がない」というようには言えないと思う。

初めの「日中両方二つ椅子」のワークの時、日本側の人が自分の政府を変えられなくて、何もできないという話を聞いて、わたしは憤慨した。政府に対して無力だという話を言ったまま放棄することにしたのは、ひどいではないか。どうして、彼らは何かできることをする可能性をよく考えないか。例えば、できるだけもっと多い日本人に南京大虐殺の事実を伝えるとか、他の人にこのセミナーを紹介し推薦するのである。今、その時の考えを回想して、やっと分かった。わたしたち（中国人）は口先だけの謝罪ではなく、現実的な行動がほしいのである。わたしもずっと憎しみに陥っていたくない、その状態を変えて、或いは解決する方法を探したいのである。

セミナーの和解の段階で、長い間言いたかった「あなたを許しました」という言葉を言った。背後の沈黙を感じても、相手の誠実を感じられるのだから。その言葉を言った後、実はずっと不安を感じた。わたしは許すという資格を持っているかどうか、皆さん（中国人）を裏切るかどうかと考えていた。しかし、これはわたしがこのセミナーに参加する日本側の皆さんに言いたい言葉である。日本側の皆さんがほかの人の犯罪のために南京に来て謝ることをするのだから。戦争との距離が遠い被害国の人としての私も南京大虐殺の心の重荷を卸して、気持ちを軽くして未来へ行きたいのである。加害者としての日本の皆さんは、そんな希望をもっと強く感じていると信じる。わたしは日本側の皆さんが何度も涙を流して反省するのを見て、地面に埋められ、将来その土から芽を出す種のようなと思った。芽がでて未来平和の樹に成長するかどうか、それはこれからの問題だ。

歴史の事実はもう変えられない。今、変わるのは、人の考えと行動だけである。もちろん、もっと重要なのは、未来の方向である。

セミナーの後、わたしは心が軽くなって南京大虐殺に関する資料に直面できると思うが、心の中にある声にならない声が南京大虐殺の真相をもっと深く理解することを制止していることを感じる。例えば、南京大虐殺に関する物語を

知ってその物語の詳しい様子をもっと深く理解しても、その物語に対する感じと気分によりよく対処するにはいい影響がなさそうだと思う。特に日本のプレイバックと連絡するとき、心の中にある声がある。それは「南京大虐殺の重荷を卸しても大丈夫ですよ。日本のプレイバックとの付き合いは、普通の友達との付き合いと同じ、相互理解できる人間同士として付き合いたいという単純な願いです。」なぜそういう態度になったのか、確かな原因はわからない。それは南京大虐殺の真相に直面することから逃がれるための方法をまだ得ていないから。でも、ずっと痛みを陥っているのは嫌で、未来へ向かうために、南京大虐殺の重荷を卸したいのだろう。

自分の都市に戻った後、テレビで時々放送する抗日戦争の映画とドラマを見たことがある。国民党の抵抗とか、スパイとか、日本鬼とか、侵略者とか、いろいろなシンボルがある。90年代に生まれた妹が日本人に対して抱いている憎しみは、私には想像もつかない。例えば、大学に入って日本語ができると将来の仕事によくて、日本語専攻をぜったい選ばない。それから、日本の会社に就職しない、日本の映画を見ない、日本ということを聞いた時「私の前で日本のことを言わないで」という表情が表れる。わたしたちに比べて、若いから、戦争というものは、彼ら（90年代生まれた人たち）にとって、もっと遠いものである。生存者がだんだん亡くなっていけば、戦争の歴史と痛みが少しずつ忘れられるのではないと思う。逆に、忘れるのが怖いために心に刻み付けて、何度も何度も提示し、何代にもわたって忘れないかもしれない。中国の人々がそんな印象を持って南京大虐殺や日本民族を見れば、他の角度から南京大虐殺や日本民族を認識する願いを全て抹殺するかもしれない。

だから、戦争の歴史認識のために、早くこのセミナーに参加するのが重要だと思う。皆さんが過去に止まって、現在に來ないから、痛みと憎しみを感じて、そのうえそんな感覚を離したくなくなってしまうようになった。表面的に彼らは普通の人と同じであるが、過去の体験のせいで、現在を感じられないし、事実的な周辺の事件を了解できない。演劇のような感覚が近くて遠くない方式を通じて、苦しみを負担していた人を助けて、もう一度苦しいものに触れて、他の人が見守りサポートしてくれる場で苦しみをしっかり感じて、安心して自分の気分を表現することができる。そのほか、セラピストもそばにいるのだから、



彼らはその導きを受けて、自分で傷を治す方法を探すこともできる。彼らを許さないと、傷が何代にも渡って受け継がれ、後の世代が傷を背負って、過去と現実の間で苦しい生活をするかもしれない。

Playbackの俳優として、ドラマセラピーに対して興味も持っている。だから、セミナーの参加者以外の角度から感じることもある。以下の考えはそれである。東洋と西洋の文化の差は大きい。その中で、集団主義と個人主義の差は大きい。中国の場合、子供から愛国主義の教育を受けていた。個人の名誉と恥は、集団との関係が緊密である。自分の行為が普段は集団主義の意識の影響を受けてなくても、大きな事件の場合に、たとえば南京大虐殺と日中関係など、個人が国家・政府と一体化するかもしれない。例えば、各国の関係を議論する時、「わたし」ではなく、「わたしたち」という概念を使って、自分の観点ではなく、国家或いは大部分の人の観点を表現する。わたしたち子供から受けていた教育では個人の利益は国家の利益に従うべきで、すべての場合に国家の名誉と恥が一番で、個人の感情や観点を強調すべきではないとされてきた。そのため、両国の人が集まる時、特に南京大虐殺が話題になる時、自分の観点を表現するのはだめだと思って、すべての話が集団の観点を手離さないのである。実は、プレイバックの俳優として、個人的な角度から自分の感情と観点を表現するのはほかの人に比べて難しくない。俳優として舞台と現実の区別に関する訓練があるほか、もっと敏感にセラピストの意向を受けて理解できる。しかし、自分の観点を表現するとき、感覚が複雑で、確定できない状態もある。ある人が「セミナーに参加して自分の観点が変わっても、他の人の観点を変えられない」というのを聞いたことがある。わたしはその人が無意識的に自分と集団を同一視して、自分が変わるという事実を無視していると思う。日本側の参加者が無力感を感じる原因はそれであるかもしれない。

だから、わたしはセミナーがある使命を背負っているかもしれないと思う。それは、参加者を助けて、集団意識からいったん分離し、自分の観点・思想をよく考える機会とするのである。セミナーの中で、参加者に国家と個人の思想を区別するガイドがあるが、言語の交流の問題のために、そのガイドの力が弱くなってしまった。通訳の役割がもっと大きくなれば良いと思う。通訳は、意味を伝えるだけでなく、参加者の理解の違いがある時、解釈やガイドを提供

すべきだと思う。

集団主義の影響のため、わたしたちは集団の思想と個人の思想を混同し、区別できなくてだんだん自分の感覚と気持ちを表現しない話し方をするようになってしまった。そのほか、自分の気持ちを表現する言葉を選別し表現する教育もサポートもない。だから、いろいろな人が感覚を表現する言葉を区別できない。ふつう、「と思う」「と感じる」のような言葉が感覚を表現すると思うが、実は、感覚ではない、事件をのべること或いはある観点・判断だけである。だから、参加者が自分が表現しているのは感覚か考えかはっきりとわかるために、もっと多くの示唆や区別が必要であると思う。

いろいろな障碍があるが、ドラマセラピーはそんな思考の障碍を突き破る方法と空間を提供すると思う。ドラマセラピーのおかげで、ある感情が表現されることができる。セミナーはもう終わったが、もっと多くの考えと議論すべきことがある。戦争の傷と南京大虐殺のような問題を解決するために、一度のセミナーでは足りない。何度も何度も心を開いて、治療することが必要であると思う。

プレイバックというモデルは参加者が速くセラピストの意味を理解し、演劇に入っていくことや治療の進度を促進したと思う。面白いのは、プレイバックたちが、参加者と演劇者として、他の参加者との距離を近くした一方で、セミナーの後、「俳優ではなく、あなたたちのようないい表現ができない。」という言葉も聞かれた。その意味は、自分の演技がよくないので、嘲笑われるのではという心配或いは批評されるのではという心配かもしれない。その言葉を聞いて、わたしはほかの参加者と一緒に演技する時、知らないうちに相手と一緒に演劇の世界に入れるようにしていたり、相手に圧力を与えないようにすべきだと思った。

セミナーを通じて、わたしは短くても完璧なドラマセラピーを体験した。セミナーの中で一番感心したのは、椅子を向かい合わせにしたワーク。萃萃先生の心理劇である。『Acting For Real』の中の一節をこれまでに深く理解できた。主役ではなくても、心理の分析から大事な点を取り出して、具体的な形式を使って表現すると、とても豊かな場面に入っていた。私が初めてプレイバックに触れた時の感動が蘇り、ストーリーが明晰になった。これまでの努力

が全て今度のドラマセラピーのための蓄積であったように思った。わたしもこれからの自分の専門家としての方向性を探し出せたと思う。

HWH は、サイコセラピーの一領域である。たぶん、中国側の主催者が交流する（心理学の先生がセミナーに参加する）ことを通じて、ドラマセラピーの目的・方法に関してよく了解し認識すると、南京でこのセミナーの発展を促進し、中国に根を下ろすためにいいと思う。

## 4

### 南京を思い起こす 2011

立命館大学大学院応用人間科学研究科  
対人援助領域修士課程 1 回生 薫石

立命館大学の留学生である私は日本側の一員として、今回の「南京を思い起こす 2011」セミナーに参加させていただいた。四日間の短いセミナーにも関わらず今回の体験が深刻で、一生忘れないと思う。

不安定な社会、自然環境の中で、震災後、戦争後におけるトラウマセラピーの重要性が顕著である。今年三月の東日本大震災は地震、津波、原発事件を引き起こし、日本社会、国民にもたらした影響は大きい。震災の復興において、震災後の心理的トラウマセラピーがかなり重要な一環だと思う。テレビやニュースに報道されたのは死傷者の人数や震災に壊された建物だけでなく、被災地に親族を探している方々の身振り、原発のため日常生活ができず家に引き込む方々の顔、避難している方々の生活場面など……深く印象に残された。2008 年に中国四川省で発生した大地震の時にも同じような光景を目の当たりにした。この 2 つの災害で、私は災害や戦争後のトラウマセラピーの重要性を直感的に認識した。災害、戦争で起こったトラウマを治して、次の世代に残さないようにいかに努力すればよいのかということが心理学の研究、そして今回のセミナーの意義ではないかと思った。

今回の「南京を思い起こす」セミナーは、“南京大虐殺”を背景として、アメリカ CHS 大学アルマンド先生の“プレイバック”手法を使って、気持ちを言葉

で表現し、聞き手にプレイバックしてくれると言う形で展開されている。村本先生が仰った通り、今回のセミナーは新しい試みである。私にとって、今までの勉強でそれと類似するドラマセラピーと触れ合う機会が何回もあったが、“プレイバック”は全く初めてである。正直に言えば、初めの日、プレイバックはどんな理論に基づくか、プレイバックを使ったらなんらかの効果があるのかと言う疑問があった。セミナーが深くなるにつれて、プレイバックの意義が分かるようになった。

先ず、話し手は自分の気持ちを言葉で表現すること自体は苦しみを軽減させる一つの手段である。そして話し手の言葉を聞き手が受け入れ、さらにそれを聞き手が無声演劇でプレイバックする。それによって話し手は、自分の苦しみを周りの人が理解でき、共感できることを分かって、トラウマが軽減することが出来る、ということがプレイバックの中核ではないかと私は思った。私自身も参加者、被験者としてプレイバックを経験した。当時思ったことと気持ちを分かち合いたい。何十人の前に座った瞬間、私は意外と落ち着いて、苦しみや、緊張など一切しなかった。そして、私のストーリーを語った。一つの場面としては、中国の悪口を言ってる日本人と会う時、自分の国を守りたいため、私はいつも考えずに議論する。喧嘩することもたまにあった。しかし、事後ゆっくり考えると、言われたことは全て間違いではない。事実であることも多い。こう思った私は心の中でかなり矛盾して、苦しんだ。もう一つの場面は、中国に帰省するとき、日本の悪口を言ってる中国の友達に会って、「それは事実ではない、日本は思ったようではない。」と中国の友達に伝えたいのに、中国人のアイデンティティを持つ私は日本の立場に立つと、周りの人に批判されるかもしれないと思って結局言い辛かった。言いたくても言えない気持ちが皆ちゃんとわかってくれるだろう。その時、悔しさと悲しさを強く感じた。以上は私のストーリーであった。語りながら、自分の無力を感じて、悔しくて涙が出るようになってきた。そして、演劇団の方々が私が語ったことと当時の気持ちを無声演劇で、正しく演じてくれた時、感動した。まるで自分の思ったことと無形な抽象的な気持ちを周囲の方々が共感してくれて、理解してくれた。自分の中の苦しみがなくなるようになって、ありがたい気持ちだけが残った。日本に帰った日の夜、今回の南京セミナーの夢を見た。

以上は今回のセミナーに参加した後に、自分が感じたものだった。その場に居て、自分のストーリーを語った方々も同じようなことを感じたと思はされた。もちろん、今回のセミナーは“プレイバック”だけではなく、他にも色々な感動があった。中国と日本の若者がお互いに理解して、日中の和解に努めたい熱意に感動した。これから世界の平和を祈りたい気持ちに感動した。わざわざ南京まで来ていただいた日本人の方々に感動した。

日本に留学している中国人として、日中の架け橋を作るように、ささやかな貢献であっても精一杯頑張っていきたい。

---

## 5

### 南京セミナーに参加して

藤原慎太郎

南京セミナーに参加しようと思ったきっかけは、戦争が人にどんな影響を与えるか知りたいという気持ちであった。その知りたいという気持ちを与えてくれたのは、第二次世界大戦に参加した祖父である。彼は南京とは直接は関係ないが、中国の東北部に出兵し、日本が敗戦した後、シベリアに抑留された経験がある。その抑留されたときの彼の年齢が、ちょうど今の私の年齢と同じぐらいであった。そのため、今のうちに、戦争が何をもたらすのか改めて考えたいと思っていた。

そんな中、私がセミナーに参加してもっとも強く感じたことは、自分の想像以上に、戦争や南京事件については日本人も中国人もさまざまな思いや感情が存在するということである。

これまで私が戦争について学んだ経験を振り返ってみると、日本の被害の面から学ぶことが多かった。戦争末期の日本本土への空襲について、沖縄でのアメリカとの戦闘について、広島・長崎原爆を投下されたことについて、などである。また祖父がシベリアに抑留されたこともあって、日本にも悲惨な被害が多かったことは、よく情報が入ってきていた。反対に、日本が外国へ攻め入り、南京事件をはじめとした日本の外で起こった事実を、教科書的に知っては

いても、現地の人々への悪影響や日本人が加害したことについて、正直なところ深くは考えていなかった。私の「戦争が人にどんな影響を与えるか」という興味は、主に戦争の被害者としての考え方が大きかったのである。そして、これまで私とは別の経験をしてきた人の戦争についての考えや感情を想像する機会は、決して多くなかった。

南京セミナーに参加することを決めた後に南京事件についての文献を読み、そしてセミナーに参加することで、さまざまな背景を持った人に直面することになる。戦争は被害・加害の両面があり、その当該国でその戦争の受け止め方は大きく異なる。それに加えて、同じ国の人であっても、被害・加害の程度や影響も、地域や個人によって大きく異なる。そして戦争体験はポジティブなものではないためか、共有もされにくい。そのため、自分以外の人が戦争についてどのような思考の過程があってその感情が湧いてくるのか、ということに接する機会は多くないのである。その意味では今回のセミナーの場で、さまざまな背景を持った人に出会い、ドラマセラピーの手法を用いて率直な感情を共有しやすい形にすることは、他の人の戦争や南京事件への感情を理解する助けになり、私にとって意義深いことであったと思う。

歴史的な問題をタブー視して放置せずに向き合おうとすることは、賛否が分かれるところだろう。また放置せずに向き合ったところで、すぐに解決するほど簡単な問題でもないかもしれない。今回のセミナーで行ったように、グループで日本と中国のさまざまな人の感情の理解を試みるということは、日中の相互理解のきっかけでしかないかもしれない。しかし、きっかけとしては十分のものであるように、今感じている。このきっかけをどのように活かすのかということ、これからの課題である。

---

## 6

### 南京を思い出す 2011 10月5日－8日

洪里奈

「南京事件」という歴史の課題に取り組みながら、私は自分のアイデンティ

ティの課題についてとことん悩む日々であった。このワークショップの中で、私はどの立場に立つべきだろうか、私はこの場所に居ていいのだろうか、と。

そんな私にアルマンド氏は「透明人間にならないように」と配慮してくださったが、その時、これまで「透明人間」である自分に安住していたことに気付いた。3年前の立命館大学でのワークショップに初めて参加してから、これまで自分なりに取り組んで来たつもりであったが、日中の問題に取り組む時、私はいつもどこか「透明人間」であることで直面することを逃げていた。ワークの中でアルマンド氏にスペースを与えられた瞬間から、私はこの場所にいる実感を持つことが出来たが、同時に部外者でも透明人間でもない生身の私でこの課題に向き合わなければならなくなった。そしたら、とても怖くなった。

コリアンとして、戦争の被害を受けた在日朝鮮人の子孫として、しかし日本で生きる者として・・・オブザーバーにはなり切れないが、「謝罪」をすることも出来ない私は、ワークでは日中どちらの椅子にも立つことが出来なかった。

しかし、これでいいのだと思う。私はアルマンド氏に「揺らぐ存在」というスペースを与えられたように思うからだ。追悼の儀式の時、アルマンド氏やそばに居てくれる友人に支えられて、揺らいでいていい、という安心感をいっぱいもらって、私の立ち居地が確立されたような気がする。

揺れる中で気付いたことは、言葉に出来ない悲しさや寂しさは、被害者の子孫も、加害者の子孫も同じだということだ。その想いを共有した私達は、言葉や文化の壁を乗り越えて行けるような気がする。私は、日本人らしいアイデンティティと、私の家族の被害の記憶の狭間でずっとこれからも揺れ続けるが、その葛藤を乗り越えて、いつかどちら側にも寄り添うことが出来る存在になれば、と思う。

今回のワークショップによる成果は、ワークショップの中や、すぐに確認することは出来ないだろう。これから南京で得たことを参加者一人ひとりが考え、どのように行動するか、だと私は考える。

私は、今回出会ったかけがえのない友達とこれからも交流を続けていくこと、再開までに中国語を本気で勉強すること、次回のワークショップに必ず繋げていくこと、そして東アジアの平和の為に日々一歩一歩前進する、ということを誓いたい。

## 思い出と感想（翻訳）

鸣去剑

中日両国は“一衣帯水”の隣国です。昔、多くの日本留学僧は文化などを勉強しに中国にやって来ました。その中の阿部仲磨呂はとても優れた人です。阿部は博学多才で、感情に富み、性格がおおらかな人だという。また、天才詩人と呼ばれている。彼は中国の唐の有名な詩人李白、王維とも、密接に付き合ったという。天宝12年（753年）、阿部氏が日本に戻る途中、なくなられたと聞いて、李白は悲しさのあまりに《哭晁卿衡》、という詩を泣きながら書きあげたという。

“日本晁卿辞帝都，征帆一片绕蓬壶。明月不归沉碧海，白雲愁色满苍梧”。詩人は阿部を名月とたとえ、彼の死を名月が海に沈むとたとえました。感情を込めた詩は二人の友情をよく現し、千年の中日友好をイメージする不朽な名作になっています。

しかし、九死に一生でまた長安に戻った阿部は李白の詩を見て、万感が胸に集まり《望郷》という名詩を詠んだそうです。

卅年长安住，帰不到蓬壶。  
一片望郷情，尽付水天处。  
魂兮帰来了，感君痛苦吾。  
我更为君哭，不得长安住。

このことから、中日友好関係はすでに唐の時代から始まったと言えましょう。近代になって、日本軍国主義者が主張した「大陸政策」の影響で、二回も中国を侵略する戦争を仕掛けました。1895年の日清戦争と1937-1945年の中日戦争です。特に、1937年12月13日から1938年の間に、日本軍は南京で悲惨な大虐殺をし、武器のない国民党兵士と罪のない南京市民を幾十万人も殺しました。地元の生産などにも多大な損害をもたらしました。

しかしながら、戦後からいままで、それについて日本の右翼は夥しい不実な



言論を絶えず投げ出したり、靖国神社に次々と参拝にいたりして、中日両国関係の友好発展を妨げています。また、中国民衆を痛く傷付けています。嬉しいことに、日本の友人のみなさんは中国人に幾度も謝りました。日本の学生、教師、民間団体の方々は何回も南京大虐殺記念館へ見に行ったりする行動で、日本軍国主義者がやったことについて謝りの気持ちを表しています。この方々の行動は中日友好を促したと思います。

今回のHWHはとても積極的な意義があると感じられます。中日両国の若者間でコミュニケーションが行われたり、双方共に関心を寄せる話題をめぐって深く話し合ったりしてとても意義深いワークショップができました。

ようやく得られた平和を若者たちは手を繋ぎ、努力して守っていこうと誓いあいました。歴史は過ぎ去ったもので、過去の悲しみに耽けないで、現実直面して前向きに中日友好のために頑張っていきましょう。

---

8

## 南京を思い出す 2011 10月5日－8日（翻訳）

黄志敏

歴史の傷を背負うため、腰を曲げる（謝る）のはいかに難しいことだろう。

人々が語る戦争のイメージに耳を傾けると、少なからぬ人たちの記憶がぼんやりしたものであることに、いささか愕然とした。しかし、その瞬間逆に考えれば、これは良いことかも知れないと思った。反省というのは必ず重くないといけないのか？必ず復讐という気持ちでこの会議に参加しなければならないのか？ハンナ・アーレントの思想に沿って、ファシズムの起源は何か？われわれはどうすればファシズムを避けられるのか？と考えた方がもっと大切だと考える。

誰があなたに暴力を行う勇氣と力を与えたのか？

アルマンドがどのような意味でいったのか私はあまり理解していないかもしれないが、ある言葉が私を触発した。それは、「怒りや恨みを発散できない場合、いつか戻ってくるだろう」というものだ。仏陀は、人々が修行をすること

によって、ネガティブな感情をなくすことができると教えた。心中の怒りをコントロールできないと、人は前に進めない。

江主席はかつて「日本人を鬼と呼んでいた時代に生きていたが、優しく、謙虚で礼儀正しい若い日本人を見ると、それは中国の戦場での殺人鬼と一緒にするのは無理だ」と述べた。しかし、日本人と触れあうことが増えるに伴い、彼らを深く知れば知るほど、この二つのイメージが重なることが次第に増えてきた。それはとても恐ろしいことだ。

今日、日本はアメリカ占領期には自信がないという特徴を多かれ少なかれ子供が持っていると言われている。政府はまだまだ閉鎖的だ。この土地に専制政治の亡霊がまだ広がっている。原子力発電所の爆発は、世界に耐え難い混乱を与えている。私はこの国の将来を心配している。身を束縛しているものから解放されないと、社会は進歩できないからだ。

すべての社会は、"沈黙で無知な谷"のように、常に"預言者"とそれを真剣にとりあげる人がいる。しかし、そのような人の数は少ない。戦前、日本には希望に満ちた政府（清末の政府をイメージしてほしい）があったが、世界大恐慌の影響で社会の矛盾が激化されたあげく、日本は軍事政権を選択した。歴史から学ぶのは謝罪のためではなく、ファシズムが生まれ暴力が再現されるのを避けるためなのだ。私達は、暴力をふるわれ、あるいは侵略されることを引き続き警戒し、自分あるいは他人を守るべきなのだ。

この意味で、日本人々に理解させるのはたんに重要だというより、必要なことだと思う。

## | 9

### 国際セミナー「南京を思い起こす 2011」を振り返って思うこと

立命館大学大学院応用人間科学研究科

修士課程 1 回生 川崎宏祐

セミナーのレポートを書いている今、自分でも不思議なほど落ち着いた気分であることに気付く。かつて日本軍によって大虐殺が行われた南京に行き、そ

の地で見て、聴いて、感じたことのすべてが、私の中にある。このセミナーに参加できたことを心から幸せに思う。

しかし、南京で過ごした日々を振り返ってみると、決して楽しいことばかりではなかった。4日間のワークショップを通して、日本と中国それぞれの参加者の思い、また幸存者の方からは当時の体験をきいた。戦争の深い悲しみ、日本に対する怒り、中国への謝罪、心からの平和への願いなど、いろいろな感情がその場に溢れていて、私はそれらの感情に押し潰されそうになった。「日本人として大虐殺の歴史と向き合うのか」「日本人としていかに中国の人と向き合うのか」という、「日本人」としての自分の生き方を常に問われていたように思う。これはとても困難なことで、今でも答えは見つからない。これからも考え続ける必要がある。

ワークショップに参加し、一番悲痛に感じたのは2日目の日中の対話のワークのときだ。さまざまな感情が出され、最終的に中国側の謝罪を求める声に対し、日本が謝り続ける構図になった。普段は考えもしない「日本人」という意識を問われ、また日中の歴史についてあまりにも無知であると実感していたことも重なり、私は無力感でいっぱいになった。それに加え、日本が中国に謝り続けるという構図への違和感もあった。何も解決のためになっていないように感じた自分が嫌になり、ここにいる資格がないようにさえ思えた。結局どうしたらいいのか分からず、どうしようもできない自分が悲しくなった。

4日目、燕子磯記念碑で慰霊祭のとき、それまでの言葉にできない思いが落ちていったのを覚えている。とても晴れた日で、かつて大虐殺があったとは到底思えないほど、静かで穏やかな場所だった。周りを見渡すと、ワークショップ参加者の姿があった。当然のことだが、この当たり前のことが私を救ってくれたように思う。日本と中国、それぞれの背景は違えども、平和について一緒に考えようとしている人たちがいるという事実。見えなくなっていたものが、一気に見えたような気がして、少しずつ気持ちが楽になっていった。自分の中にあるこだわりのようなものを捨て、まずは中国の人と向き合い、その思いを受け入れることから始めたいと思った。ここでやっとスタートラインに立てたように思う。

改めて、日本人としての自分の生き方を考えてみる。まずは日中の歴史を学

ぶ義務がある。私を含め、その歴史を知らない人はきっと多い。日本人の中にはメディアの情報のみで中国のイメージを決めつけている人も少なくない。日常生活では気づかないところで、日本が過去に犯した罪に今なお苦しんでいる人がいる。まずはこの事実に向き合い、ただただその人たちの思いを受け入れることが大切なのだと思う。

次に日本人であることの責任を持つ必要がある。そして、日本人であることの誇りも感じていたい。誇りと書くと賛否両論あるだろう。確かに、中国に対する日本の行為は決して許されるものではない。同じ人間とは思えないほど残酷で、情けなくもある。しかし、このような過去を持つ国に私は生まれ、日本人として今を生きている。日中の歴史に向き合っている自分を肯定したいという気持ちで、誇りという言葉を使った。誇りを感じようと思うのであれば、当然責任を持たなければいけない。どのような形で日本人としての責任を果たすことができるのか、正直まだ分からないが、きっと大それたことではない。日中の歴史を学び、平和について考え続ける姿勢こそが、責任を持つことの第1歩ではないかと感じている。

自分自身に向き合うという大変な作業もあったが、それ以上に人とのつながりを感じることができる4日間だった。参加者全員がいろいろな思いや感覚を共有した。たくさんの涙もあったが、それ以上にたくさん笑顔があった。言葉の壁はありながらも、何とか分かち合おうとたくさん話をした。セミナーの時間外でも一緒に飲みに行ったり、また最終日の夜、南京師範大学のキャンパス内で缶ビールを飲みながら、一緒に歌を歌ったり…。日本人である私たちのことを「ベストフレンド」だと言ってくれた中国の友達。ともに過ごした4日間は決して忘れることのない、本当に幸せな時間だった。

セミナーに参加した理由の一つは、人とのつながりを考えたかったからだ。このつながりを教えてくれたのは、戦争で中国に渡っていたことのある祖父である。祖父は衛生兵として、湖北省あたりを転々としていた。終戦後しばらく中国に残っていた際、中国の人が優しくしてくれたという話を、祖父は私に話してくれた。本当は誰にも語られることがない、祖父の中だけにある物語があるかもしれない。しかし、どんなに厳しい時代でも人とのつながりをつくっていけるという、祖父からのメッセージを素直に受け止めたい。このセミナーに

において、私は確かに人とのつながりを感じることができた。

政治の動きなど、現在の日中関係は決していいとは言えない。マイナスイメージを発信するようなメディアの仕組み、そのイメージだけでその国の人柄を決めつけてしまう傾向も両国ともあるように思う。変えていかねばならないこと、変えてはいけないもの。既成概念にとらわれることなく、大切なことは自分自身で選び取っていきたい。

日本人としての自分の生き方を考える作業は始まったばかりだ。それと同時に、南京での体験を周りの人たちに伝えていく必要がある。どんな苦難でもいつか乗り越え、人とつながることはきっとできる。初心を忘れず、負けずに頑張っていきたい。このセミナーに参加しなければ、これほど日中の歴史や平和、そして自分自身のあり方について考えることはなかっただろう。このような機会を作っていただいた村本先生をはじめとする諸先生方、プレイバックの皆さん、日本と中国の参加者の皆さん、いつも私を支えてくれるすべての人たちへ感謝したい。心からありがとうございました。

---

## 10

### 南京を思い出す 2011 10月5日－8日 (翻訳)

黙嶺

わたくしは、黙嶺と申します。

五日から八日までの四日間、HWHに参加でき、先生とお会いできたことを光榮に存じます。先生と歴史問題についてお話しさせていただき誠にありがとうございました。

今度の活動につきましては、初めに、自分自身はこのような場合では、きっと中国の立場に堅く立つと、ずっとそう思い込んでおりました。しかし、アルマンド先生の力故かもしれませんが、本当にそう簡単に立つことがなかなかできません。色々な複雑なことを考えるようになりました。正直に言うと、このHWHに参加することは確かに私の日中関係上の歴史問題に対する考え方と認識を変えました。

私は HWH で、勿論最初から中国の立場に堅く立っていました。正直に言えば中国の立場に立って、劇団の人と学生たちから「この活動まで、南京大虐殺事件に関して全然分からなかった」と聞いてから、日本の戦争と大虐殺に対する曖昧な態度や、日本の歴史上と今の行為に対して、私は中国人として甚大な不満と怒りがあり、確かに日本人の謝罪に対して堂々たる感じがし、何の違和感もしませんでした。しかし、堂々たる違和感ない感じがしても、正直に言うと、私は日本の方々の目を直視することが全然できませんでした。なぜかと言うと、残酷な犯罪を犯したのは軍国主義の前世代の戦争犯人で、先生を含める日本の方々は本当に戦争、南京大虐殺と無関係で、彼らは真相を掴むため、中国に友好的態度を示すためにこそ中国にいらっしゃったからでしょう。罪人の子供も倫理上、法律上では公平に扱わなければならないでしょう。まして、もう二世代三世代過ぎた今の中国に友好的日本人の若者たちです。

それに、中国人の私が認めなければならないのは、ある日本人男性参加者のサンフランシスコでの経験のように、中国に友好、不友好の日本人を差別なく裁くべしと考え込んでいる人は沢山あり、私のような日本語専門の学生と歴史を研究する人を除いて殆どそう考えていると言っても構いません。

また、よく議論された謝罪の問題につきまして、実は、帰ってきて、友だちとほかの学部の学生さんと相談（小調査と言っても構いません）してみたことがあります。勿論この範囲は小さすぎですが、ある程度代表性もあるでしょう。この小調査によると、彼らは謝罪した日本の首相の中で田中角栄しか知らず、大平、細川首相などの謝罪行為は殆ど知りません。「中国人は、日本人が全然謝罪していないと思込んでいる」と分かりました。しかし、この HWH の趣旨と状況を紹介したら、彼らは「中国が本当に怒っているのは日本の歴史に対する態度で、そんな跪き謝罪はいらない」と言っていました。これも、両国の交流と理解の足りないことに原因があるのではないかと思うようになりました。一般の人に謝罪の実情を十分に伝えなかったことに此方にも責任があるのではないのでしょうか。

なぜでしょうか？中国側の若者に対する教育に問題があるのでしょうか？中国人、あるいは中国側が日本から欲しいのは一体何でしょうか。歴史への認識？日本の実際の行動？あるいは無尊厳の謝罪？それとも本当に戦争と無関係の日

本人を裁かれる立場に置き、そんな無尊厳な跪き謝罪が欲しいか？戦争に無関係の日本の若者がそこまでする必要があるかと。

そして、そのように相手を裁かれる無尊厳の立場に立たせ、時々歴史の傷口を開けお互いに傷つけるより、歴史を正視し互いに覚え、歴史の残酷と悲劇を踏まえながら、共に努力していくのがいいんじゃないかと。時々互いに傷つけるのは人道的には正しいでしょうか。正直に言うと分かりません。改めて考えて、中国人の私も本当に迷ってしまいました。

因みに、前述した小調査もある程度私に政治学の問題を投げかけました。それは「日本のような議院内閣制の中での内閣総理大臣は一体国全体を代表することができるか。総理大臣の謝罪は政府の名であっても、あくまでも個人的な行為に過ぎないのだろうか。中国側の怒りを静めるためいつまでも、どの総理大臣も謝罪しなければならないのだろうか。」という問題です。私の専門は政治学ではないため、このような問題は可笑しいかも知れないが、ごく現実的な、双方が直面しなければならない問題だと思っております。

日本側の若者の立場から考えると、もっと苦しく、悲しくなりました。今回南京にいらっしまった日本の若者は本当に可愛そうだと思っております。中国人と日本人のアイデンティティを換えれば、「私」は本当に戦争に無関係で、残酷な罪行を犯した前世代の代わりに謝罪するなんて、若者たる「私」はそんな重い負担を負うことができるのでしょうか。「私」は日本人として苦しみの極みです。“自分”の個人としての力はとても弱く、政府を変えようとしても、投票権を行使する他、なかなか何もできないのではないのでしょうか。「私」個人として、本当にそんなに重い歴史の負担、悩みを担うなんて、できません。「私」も人間で、今後の人生で、心理上のトラウマを抱えて歩いて行きたくありません。歴史の責任は個人として重すぎるのではないですか。

しかし、そうして、日本側の立場に立ったら、私は中国側の人々の目も直視できず、怒りに直面できません。もっと怖いのは、和解を求める HWH の中でも、日本側に立って弁解して、裏切り者と言う悪名を押し付けられることは、個人としての私の負えないことです。ですので、二日目の午後のエクササイズで日本の椅子の後ろに立つことができませんでした。

また、できるだけ中立的な立場にも立ってみました。中国側の考え方も

う内面化され、自分自身の一部になってしまったので、できません。アルマンド先生が、あえて「個人」単位での行動を中心にした背景には、こうした問題への解決のヒントを与えてくれましたが、知らず知らずのうちに自らが所属する国家・共同体に置き換える心の癖を克服することができませんでした。

昨日、パソコンで参加した友達とチャットするとき、ある中国側の歴史学生は「歴史上、中国に対して残酷な虐殺を犯した侵入国は多いのに、なぜ日本に対しては放っておかないの」という疑問も出しました。勿論いろんな説が出ましたが、私に言わせれば日本の行動にも原因があれば、中国の心理上でも原因もあるのではないのでしょうか。国交正常以来、此方はずっと前向きな立場を取っていて、両国の友好を発展させてきました。しかし、80年代に日本の右翼が「南京大虐殺は大きなきごとがあり、真実ではない」との刺激を中国人に与えました。ですので、中国にとって歴史問題につきまちは、究明しなければならないこととなり、右翼を掴んで論争してきています。これはいわゆる日本の行動に原因があることです。また、長い歴史の中で、中国は日本の「朝貢国」で、日本人に「小日本儿」との軽蔑的な名をつけました。特に中国語で「小」という字が軽蔑気味で、真面目に扱うに当たらないという意味もあります。しかし、近代以来、特に太平洋戦争後、日本はまた中国を超えて世界第二の先進国になって、中国人の心理の中でなんだか越えられない、現実に直面できぬ考え、葛藤などがあり、歴史上の問題で日本から何か心理上の慰めを求めているのではないのでしょうか。

もう一つは自身の仕事についてですが、今度私は参加者として、また通訳者として、二重身の役割で参加していました。以前、沢山の通訳をしていましたが、今度ほどひどい圧力と緊張を感じたことは、正直に言ってございませんでした。中日間の歴史上の問題は敏感すぎて、もし自分の通訳のミスで何か論争、喧嘩を起こしたら、と思うと、こんなに重い責任を負うことになり、なかなか重大過ぎです。

どうしようかな。皮肉なことに、HWHに参加し、和解を求めようとしていましたが、私自分自身はとてとても大きなジレンマに陥ってなかなか出ることができません。どうしようかな、私も分かりません。ですので、以上の文は本当にロジック無く混乱していて、お読みになるのにご迷惑をかけてしまうか



もしもかもしれませんが、申し訳ございません。

もしかしたら、迷ってしまってジレンマに陥ったのも嬉しいことではないでしょうか。日本語専攻の学生であっても、以前の考えは非常に浅くて無責任だったと痛感し、今度の経験を契機として中日両国のことをより深く考え、両国の誤解を消していくのは重大な責任だと痛感しています。中国語で「任重而道远」と言います。

以上です。どうも有り難うございました。

11

## 南京を思い出す 2011 10月5日－8日 (翻訳)

劉忠良

二年前、私は「南京を思い起こす 2009」に参加した。その後、いろいろな感想があって、時々戦争によるトラウマと日中和解に関する問題を考えていた。2011年、「南京を思い起こす」を再開することを知って、ある願いがだんだん強くなっていった。それはもう一度日中両国の友達と自分の考えを交流したいということである。今度のセミナーで、時間が足りなくても、できるだけ日本側の先生と学生との対話を通じて、いろいろな新しい感想を得ることができた。二年前からの感想と今度の感想はとても多い。しかし、それらの感想が心を邪魔しているのもので、私はある事についてわかったと思うが、その事について確かなことを言うことができない。たぶんそれらの感想を整理するために、もっと時間が必要であると思う。

二年前のセミナー以前、私は心理学の視点から日中戦争の問題を考えることは全くなかった。大学時代「民族心理」というのがあることを知り、その後、張連紅先生とほかの南京大虐殺の研究者達が生存者の戦争によるトラウマとその修復に関する研究に従事していることを知ったが、心理学の内容をよく勉強したことがないので、その分野に特別の関心はなかった。しかし、二年前のセミナーとその後の自分の生活体験の中で、心理学の理論を勉強しなくても、心理学の重要性がだんだんわかってきた。

二年前のセミナーの後、生存者の心理を少し理解した。実は、彼らはとても寛容的だと思った。戦争を体験していない若者（数と割合が多い）が日本を憎み、「日本人をすべて殺せ」のようなスローガンは彼らにとって全然過分ではないのに、戦争を体験したことがある人がそのような寛容的な思いを持っているのは、ちょっとおかしいと思う。父・祖父の世代との交流が少なすぎるのかどうか、私にはよくわからない。そのような問題が日本側にも存在していたかもしれないと思う。二つのセミナーの時、日本からの友達が述べた戦時の兵士の物語を聞いた。それら「加害者」の考えと心理状態を、たぶん大部分の日本の若者もわからないかもしれない。私は、その物語の中の「加害者」たちが、あることを他の人に伝えたいのだと思う。「あること」というのは、加害者たちの戦争・暴力の体験に対する困惑・反省だろう。

この二年間、私もある事件の中で、「被害者」・「加害者」或いは「被害者と同時に加害者」になってしまった。それによる自分の感想を見れば、私は私達に自分の体験を述べた生存者のおじいさん「常さん」とおばあさん「夏さん」の感情をよく理解することができると思う。彼らはそんな悲惨なことが発生するのを避けたいし、「加害者」に対して、昔の事実を承認さえすれば、ずっと非難するつもりではない。今回のセミナー後、私はあるモンゴル族の中国人と対話したことがある。その中で、彼は「昔我が民族は世界に災難を作った、、、」という話をした。その話を聞くと同時に、私の心は昔の歴史を非難しなくなってしまった。その前心の中に存在していた言えない感情もすぐなくなってしまった。それはセミナーの影響か、生存者のおじいさん「常さん」とおばあさん「夏さん」の影響か、或いは人間の心の本性か、私はまだ確認することができない。そのほか原因は、生存者のおばあさん「夏さん」が言ったように、もしかすると私たち「日本人と中国人」が同じ言語を使う「ある共同点を持つ」ことでそのような問題がなくなったのかもしれない。

実は、被害者のほか、加害者の心理状態は何であるか、彼らはどんな心理的な影響を受けているか、それは今度のセミナーを通じて、最も知りたいものである。自分自身の問題を考えていたからかもしれない。自分自身の考えによって戦争の加害者の心理を推測すれば、戦争の時悪いことをすると、戦争の前の自分を比べて、自分がいい人か悪い人かわからなくなってしまったかもしれない

い。そんな迷惑は、加害者たちの心理のほかに、加害者たちの行為に大きな影響を与えた。例えば、靖国神社を参拝し、昔の軍隊の服に夢中になるのは、いい人だと思う極端の例であると思う。それに対して、自分の過去から逃げて、他の人に全然言わないのは、悪い人だと思う極端の例であると思う。大部分の加害者はいい人か悪い人かわからないまま苦しく生活していたのであろう。実は、この迷惑も次の世代にも影響していた。セミナーに参加した日本の友達から見れば、その迷惑を感じるができる。子供のころから尊重していた先祖が戦争の時悪いことをしたのが恥ずかしい人や、先祖の心理の異常を敏感に感じたことがある人もいる。

私ができるだけ知りたいのは、戦争に参加した兵士たちの心理状態と、その心理状態が私の推測と同じかどうかである。もし被害者がそんなに寛容であると同時に、加害者がいい人か悪い人かという迷いの状態に陥っている時、交流の障害のために両方が苦しい心理状態に陥るのは、残念であると思う。最も残念なのは、両国の若者が先祖の感情をよく理解できなくて、自分の戦争に対する認識に基づいて、相手と対抗する状態に陥って、歴史のトラウマの修復と両国の平和にとって悪いこと、たとえば反日・反華デモなどをすることである。二つのセミナーの時、生存者のおじいさん「常さん」とおばあさん「夏さん」が日本人参加者に「みんないい人だ」と言った時、多くの人が泣いていた。もし日本からの友達の内の中にいい人か悪い人か迷いがあれば、その話を聞いて、迷わなくなったかもしれないと思う。そのほか、もし戦争に参加した兵士がその話を聞いたら、その迷いもなくなるでしょう。そうすれば、日中両国戦争を体験した世代も体験しない世代も正常的な心理状態に戻ることができて、日中両国の平和にとって、もう一つ保証になると思う。

次の問題は、被害者の寛容さは正しいかどうか、加害者は本当にいい人かどうかという問題であるかもしれない。実は、我々漢文化圏の人間性に対する観点は人間性はもともと良いというものである。その問題の答えはこの観点であると思う。生存者のおじいさん「常さん」とおばあさん「夏さん」も戦争は天皇・日本政府の責任で、日本人民の責任ではないと言った。別の観点もある、例えば、天皇・日本政府は日本人民の代表であるという見方である。それも正しいかもしれない。しかし、天皇・日本政府と日本人民は一体であるかどうか

にしても、人間性が高い人々が他の民族の人を殺す悪魔になる原因をよく考えなければならぬと思う。実は、私のこの理解は正しいかどうか私も確認できない。しかし、それらの問題を考えると、きっと正しい答えを得ることができると思う。

セミナーの感想は充分の時間を経てまじめに整理し考えなければうまく言えないかもしれない。しかし、歴史の真相は、日中歴史を理解し、それからその時期の両国・両民族・国民個体を理解することの手段だと思う。或いは、真相に最も近づく歴史認識がなければ、近代の日中両国の歴史、またはその時の両国・両民族・国民個体を理解することができないと思う。セミナーの後、私の人間の本質に対する考えは、正しいという認識を得た。それは、人間の本質は体験した歴史のメッセージの組み合わせだった構造である。ある人・民族・国家を研究するためには、その人・民族・国家の歴史の真実を研究すべきだと思う。間違った歴史認識による、日中両国の和解は無理であると思う。

本当に、色々な感想を短期に言えるのはできない。まずこの小さな感想文を書いた。このセミナーの一番大きい意義は平和を追求している我々日中両国の人のために相互交流のチャンスを提供するものであると思う。日中和解のために、最も相互交流がなければならない。今後、続いて交流したい。生存者のおばあさん「夏さん」が言ったように、みんなで同じ言語を使うと、問題がなくなる。

---

## 12

### 国際セミナー「南京を思い起こす 2011」に参加して

仲野沙也加

「南京という場所に来て、戦争の与えた憎しみ、苦しみ、悲しみを感じたこと、しかしそれだけではない、この場所の暖かな穏やかな空気、そして出会った人たちの優しい笑顔、温もりを決して忘れず心に刻みつけます。そして必ずまた、この場所に戻ってきます。」

私は、ワークショップの最終日にこのようなことを話した。涙ながらに話し

たこの言葉を中国人の学生さんたちは耳を傾けて目を見て聞いてくれた。「わたし」という存在を真摯に受け止めようとしてくれた。一人一人の様々な思いがあり、ストーリーがあり、そしてあの5日間があったのだと思う。今、一人一人の顔を思い返しただけで、泣きそうになる私がいるが、それだけ彼らが私に教えてくれたことはとても大きい。南京での5日間は私の中でのかけがえのない5日間であった。

このワークショップに私が参加した動機は2つある。1つめは大学院に入ってから、戦争のトラウマの世代間連鎖について知り、戦争が今現在の私たちの心にも深く影響しているという事実を知ったことである。そして、このワークショップに参加することは、学校や歴史の授業では伝えて頂けなかったことにも重要なこと、それを感じ学ぶことができるのではないかと考えたからである。2つめは村本先生の「中国の学生さんたちが、「日本人は優しいね。今度は日本人の学生さんたちとも話したい」と言ってくれたのだよ」という言葉に、「わたし」の中の何か動き、涙が出て、「日本人」としての「わたし」が「行きたい」と感じたことである。

小さい頃から「戦争」という言葉について嫌悪感を抱いていた。どんな人になっても「温かさ」がある。その「温かさ」を奪い、人を冷酷にする。その事情は国家の事情…。幼いながらに苦しく悲しい現実が許せなかった。ただ、そのときの私は歴史の授業と、私の母方の祖母の兄弟、祖父の父は沖縄で戦死した話を小さい頃から聞いてきたことから、日本は「加害者だ」というよりも「被害者だ」という意識のほうが大きかった。そんな私の意識が変わったのが高校生の時に読んだ一冊の本である。この本は、「日中戦争で参戦した父親の抱えていた加害をした自分へのトラウマ、そして家族にもその歴史は刻まれ一人一人がそれぞれの人生と向き合っている」という話であり、日本人の戦争の加害について書かれていた。私はこの本をみてとてもショックであった。そこで日本人が与えた非人道的な暴力を知った。日本人として苦しく、「許せない」という憎しみがわいた。同時に「私は日本人なのだ」ということを悲しくも思った。その本を私は「思い出の品」として紹介した。私はこの現実があり、この話を持ってこのワークショップにいた。

しかし、そんな私の中のストーリーがワークショップの日になを重ねるごと

に、心の深いところから思い出された。それは父方の祖父の存在である。父方の祖父は、私が4歳のときに逝去した。祖父との思い出は少ないが、優しくて温かかった記憶が残っている。家族からは「おじいちゃんはね、さやかのごことが大好きで、さやかを銀行に手をひいて連れて行くことが楽しみで、毎日のように銀行に行っていたのだよ」という祖父の話をしてくれ、今でも大好きな祖父である。しかし、祖父は「飛行機に乗りたい。そのためには空軍になるんだ」と志をして自ら兵士になることを望んだ人であった。祖父は、太平洋戦争に参戦し、真珠湾攻撃で特攻隊になれなかったことをすごく悔やんだのだという。家族から聞く祖父の戦争体験は、戦争での祖父の加害、被害については詳しく話されなかった。もしかしたら祖父は家族にも詳しく話さなかったのかもしれない。そんな祖父であったが、祖父は兵隊になるための学校に通い兵士になり、そして高い地位で生き残って帰ってきたことから、国からお金を支給されていた。このお金が具体的に何なのか、私は分からなかった。しかし、祖父が亡くなりその後祖母が亡くなった時に、母からこのお金の存在を聞いた。そして祖父母の部屋から戦争での思い出の品が出てきた。それは戦争を肯定する文書がかかれていた。記憶の中の大好きな祖父…その祖父の思い出の品…、その現実をなかなか受け入れることができない自分がいた。「祖父は飛行機に乗りたかったから、空軍になったのだ」と思いたかった私がいた。そして、この思いをもち続けたのであろう。私はこの品はワークショップには持ってこなかった。しかしワークショップでのさまざまな体験を通して、そんな祖父の存在が「戦争の加害者であったのだ」ということを受け止めなければならないのだと感じている私がいた。

この現実と向き合いながら、プレイバックシアターに参加した。そのとき、中国人の方たちの日本人に対する戦争の暴力について罵倒する声、そしてそれを聞く日本人の方の場面を見て、ただただ無力な自分と現在もある声に対して圧倒しながら辛く苦しい感情が浮かび上がってきた。そしてその背景には祖父の存在がいた。いろんな感情に押しつぶされそうになっている私を見て、村本先生からとても温かい言葉をいただいた。「すべての感情を受け止めること、認めること、それが必ず次への一歩に繋がるから。」先生の温かい言葉、温かな目、日本人の参加者の方々の温かさに感謝し、そして今いる自分を感じ、プレ

イバックシアターに私の話を共有していただきたいと思い、話すことを決めた。プレイバックシアターで私の話を演じて頂いた後、私の中での「いろんな気持ち」を体感的に受け入れている「わたし」がいた。「わたし」のストーリーを感じている私がいた。この体験で、私が「わたし」と真に向き合い、いろんな気持ちを受け止めることができた。私は、ただただ泣くことしかできなかった。しかし、そんな私をいろんな方たちが受け止めようとしてくれた。この話をした後、プレイバックさんの方が「あなたの話してくれた物語は決して忘れません」と言って下さったこと、シアターで私を演じて下さった学生さんの「あなたを演じられて良かった」と言って下さったこと、役者さんたちが「あなたの感受性はいいこと」と言って下さったこと、中国の学生さんたちのこんな私でも受け止めてくれ、抱き合ってくれたこと、優しく手を握ってくれたこと、すべてのことが「わたし」を受け止め次に向かう一步になったのだと思う。そしてこの経験で感じたこと、人の温かさは、この場だけでなくずっとずっと大切にしていく。このことは必ず実を結ぶのだと信じている。

中国人の学生のみなさんは本当に優しくかった。日本人の私たちに、「私は直接被害をうけたわけでないから、何も言えないけれど、でも今私があなたを許すことで、あなたの苦しみが軽くなるのなら、私はあなたを許します」「人生の障害にならないように」「正しい知識をもって素直な心で向き合えば、共に真実を受け止められる」「同じような罪をしないように私は今歴史を学んでいる」…沢山の、沢山の温かい言葉をかけてくれた。「共感」「和解」「親密」そのことを真の意味で大切なことを教えてくれた。幸存者の方のお話を聞いたこと、そのことも決して忘れない。「戦争によって多くのことを失い沢山の人が傷ついた。そのことを話すことが幸存者の方の使命だ」、「何も分からなかった私に起こった出来事、そのことを決して忘れてはいけない。人々のためにもう起こらないように、社会のために、中国と日本の若者の学生のために話している」と言い話して下さった。幸存者さんと話をしたとき、ただ悔しく苦しく泣くことしかできなかった自分を、とても温かな目でみてくださった。「日本の学生」としての「わたし」を見て話をしてくださった。優しく、真摯に受け止め話をして下さった。

「謝罪」すること、このことで終わることではない。日本と中国、それぞれ

の国での政治と教育、それぞれの背景を持ちながら、本当の意味での「和解」「修復」。それは心で「感じる」ということがとても大きなきっかけとなることを感じた。戦争の与えた傷つきはとても今現在も、私たちは抱えている。その傷つきを私たちはどう受け止め、どう向き合い、どう付き合っていくのか。流しては決していけない胸の中の思いを吐き出して、受け止めて共有して…そこからまた考えていく。私たちの残された現実とこれから築いていく未来が、少しでも健やかなものでありますように、私は考えていきたい。確かな知識と素直な心、そしてこのワークショップでの沢山の温かさというかけがえのない宝物を持って。私はこのことを、今学んでいる臨床心理学という学問に足を置いてじっくり考えていきたい。

私はこのワークショップで、新たな自分の物語を受け入れることができた。亡くなった祖父が南京に導いてくれたのではないかとも感じる。そしてこの芽生えたばかりの私の物語を心の中で育てながら、また日々を一日一日大切に温かく過ごしたいと思う。

こうした貴重な経験をさせていただけたのは、主催してくださった皆様、当日の進行をしてくださったアルマンド・ボルカス氏や、笠井綾さん、プレイバックの役者さん方、村本先生、村川先生、金丸先生、小田先生、中国の先生方、そしてプログラムに参加してくださった中国人のメンバーの方々、支えてくださった日本人のメンバーの方々の存在があったからだと思う。この場をお借りして心より感謝します。

## | 13

---

### 南京を思い出す 2011 10月5日－8日

西順子

2009年の参加に引き続き、今回もこのセミナーに参加させて頂いた。前回参加して、「癒しと和解修復、これからこのプロセスがどう進んでいくのか、できればそのプロセスを見届けたい」という思いが残っていたので、今回参加することにも迷いがなかった。



前回参加することによって、「私は日本人である、日本人であることに責任をもちたい」というアイデンティティが生まれた。今回はどんな体験となるのか、真っ白な画用紙のように、その場でありのままを見て、ありのままを映し出し、感じてみようという気持ちで参加した。

今回参加して最も印象に残ったことは、「中国人学生の真剣な眼差し、力強い声」である。今回の HWH のサイコドラマでは、中国人側の「椅子」と日本人側の「椅子」に、集合的な声を象徴させるという手法でワークが行われたが、このワークでは互いのタブーが破られ、本当の感情が表出され、中国人と日本人が対峙しあった。

このワークの最後の場面では、中国人側全員と日本人側全員が向き合った。そのときに私は最前列にいたが、中国人の学生と向き合ったときの真剣な眼差し、その力強い声がとても印象に残っている。中国人側が求めているのは「理解」だった。「もっと私たちを、中国を理解してほしい」という声だった。それに対して、私自身も「理解したい」と答えた。

前回参加して自覚した「日本人としての責任」は、「加害国であるという認識と責任」であったが、今回自覚したことは「中国の人達と、今ここで、この場所で向き合ったこと、その場に居合わせたこと、そして、今ここで、戦争被害者の子孫の声を聞いたこと、そのことの責任」そして、その場で「理解したいと答えた責任」である。一人一人の若者の眼差しと声が、ストレートに自分に届いた。

最後のワークでは、涙があふれたが、ワークの後に、中国人学生らが私に声をかけてくれた。「泣かないで」「You Can!!」と、明るい笑顔で、励ましてくれた。彼らの前に進もうとする逞しさ、強さに、私はとても励まされるような思いであった。政治的な力を前にすると、私個人はあまりに小さく、ただただ無力であり、無力感に圧倒されるばかりであるが、中国の人々が置かれている状況、立場を「理解しようとする」ことはできるはずである。

決してあきらめない力強さ、を今回のセミナーで頂いた。椅子（集合的な声）の後ろには、一人一人の市民の声があることを忘れずに、そこをつながれるよう、私も一市民として問題意識を持ち続けたい。そして、できれば心理臨床家として自分にできることも考えていければと思う。

戦争のトラウマの癒しと和解修復は、私たち一人一人が集合的な声に流されずに、またそこに埋もれてしまわずに、一人一人が自分と向き合い、相手と向き合い、与えられた命に責任をもって生きていくことなのだ、今回のセミナーを通して実感した。

今回もこのような深い体験をプロセスする場を創って下さったアルマンド先生、張先生、あやさんはじめ、日本人スタッフの先生方に感謝いたします。

## 南京を思い出す 2011 10月5日－8日に参加して

立命館大学文学部3回生  
野間るり

今回、「南京を思い起こす 2011」ワークショップに参加し、私が一番感じたことは、「日本人とは何か」、つまり自分自身が「日本人」であるのか？という疑問と、私は「日本人である」という「自覚」、これら正反対の二つの感覚である。普段、日本で生活していると自分が日本人であるかそうでないか、考える機会はほとんど無い。アイデンティティーとして自分がどこの国の人間なのか、また、アイデンティティーを考えると一番最初に挙げる項目として「日本人であること」を挙げていいのか、そのように考えることは無かったように感じる。私は「日本人である」という「事実」について深く考える機会はなかったし、「日本人である」ということはいったい何をもってそう判断されるのか、「日本人」とは何なのかという事について追及することも無かった。今回、自分のアイデンティティーについて考えるワークショップを行った際、アイデンティティーとして安易に「日本人であること」を挙げていいのか疑問に思った。なぜなら、日本で生まれ育ったら「日本人」なのか、日本語をネイティブスピーカーとして話すことが出来る人が「日本人」なのか、何が「日本人」であるのかわからなくなったからである。

今回のワークショップで私は、まず「日本人である」ことについて疑問を持ったのだが、しかしワークショップの中には、私は自分が「日本人である」こと

について強く自覚させられる事もあった。

それはまず、幸存者の方のお話を聞いたときである。想像に絶する悲惨な体験をした幸存者の方のお話を聞きながら、私はその悲惨な風景を懸命に思い浮かべると同時に、そういった悲惨な状況を生み出したのは日本兵であることを考えたとき、私はその日本人の行為に「恥」を感じた。さらに、「中国と日本の対話」というワークを行った際には、日本側の主張に納得し、涙が止まらないこともあった。私は戦争を経験していない。また私と直接面識があったり深い関係にあったりする親戚などのなかには戦争経験者はいるが、当時を子供として過ごした、どちらかという「被害者」側に近い立場の人間ばかりである。よって「加害者」としての意識も、きっとほかの参加者よりは薄いだろうと思っていた。だから幸存者のお話を聞いたり、対話のワークを行ったりしたときに流れてきた自分の涙が、一体何であるのか、これは「誰」の涙であるのかわからなかった。

しかし、上記のような「恥」や「悲しみ」を感じるという事が、「日本人であること」の自覚につながるのではないか。時代も全く異なり、私の経験したことのない戦争の中で、会ったことも無く名前も知らない「日本人」の行為について、私は「日本人」として恥や悲しみを感じたのではないだろうか。そういった感覚は無意識のうちに日本人の中に受け継がれてきたのだろうか。

南京師範大学の学生たちとワークショップを行い、祖父母、父母から（無意識に）受け継いできた悲しみ、怒り、恥をシェアし、経験していない戦争の記憶といった「亡霊」に苦しめられているという「仲間」意識が芽生えた。しかし、最終日に中国の学生たちが燕子磯記念碑で国家のスローガンを唱えている姿を見て、中国の学生たちが少し、遠い存在に思えたのも事実であるし、一体私はどこまで彼らを理解しているのか、痛みを共有している「つもり」なのかわからなくなったのも事実である。ワークショップの数日間、いろいろと気持ちが揺れ動き、今回のレポートもまとまりのない内容になってしまった。きっとこれからの人生でも、わからなくなったり、迷ったり、いろんな葛藤や疑問が常に生まれると思う。しかし、とりあえず、あのワーク中に私が泣いたり落ち込んだりしたときに、歩み寄ってくれた人々の顔や温もりだけは忘れずにいなくてはならない。

ある物事について考えるとき、いかに「自分のこと」として考えられるかが重要であると思う。今回、日本の「加害行為」について考えるとき、ワークショップ中に思い浮かんだのは韓国や中国の友達の顔であった。戦争について、「加害」について考えるとき、現在の自分と重ね合わせて考えることが多かったように感じる。しかしそれと同時に、この出来事についてできるだけ客観的でいたい、という気持ちがあったことも事実である。

私は日本史が専攻である。特に近現代史の勉強をしているので日本の「加害行為」について触れる機会も多い。日本に対し嫌悪感を抱くこともよくある。しかし私は、日本史の勉強をして、自分なりに自分の中で日本の行為について考え、清算し、心から日本のことを好きになりたいとも思うのだ。ワークショップの初日、張先生は講義の中で「歴史学の研究は“和解”を実現できる手段であるといえる」とおっしゃった。その言葉を信じ、この重たくて大きすぎるテーマについて、私は一生をかけて立ち向かおうと思う。

## 南京を思い起こす 2011 に参加して

立命館大学経済学部 3 回生

菅原悠治

私は今回で二度目のセミナー参加となったが今回参加するにあたって前回から引きずっているものがあつた。一つは前段階でこのセミナーが主として目標とするもののどの段階まで進んでいたのか、二つは前回終了時において感じた日中間の温度差である。今回参加した主な動機はその疑問を解消しにと言うのが素直な意見かもしれない。

そんな前回からの疑問を持ちつつ参加した今回は前回のように茫然としている間に置いてけぼりを食らわないように初めからノリノリで行こうと思っていたのであるが、またもや初めて見るプレイバックに啞然としてしまった。だが、少し長いプレイバックを見たときに考えが変わつた、その一つの感情を共有させる能力に驚かされた、と共にそのはっきりした一つの感情の塊のようなもの

への恐怖というのも生まれた。

そんなプレイバックを何度か見ているうちに感情がすっと入ってくるものと入ってこないものがあり、何故かを考えているうちに前回気付けなかった自分の拘りのような執着のようなものに気付いた。それは私にこのセミナーに参加する上で日本人然としないといけないと思わせている一因でもあり、文化とか伝統とかそう呼ばれるもののことである。この発見は前回から忘却の彼方に去っていたこのセミナーの外観に対する疑問を復活させた。その疑問とは扱っている問題の大きさに対してあまりにも一見さんお断り感が強いのではないかというものである。やはり初めて見る人からは明らかに変なことをしている集団に見えるであろうし、それを中に入れてみればまともなことをしていると分かると言うのはどうなのであろうかということである。ただ私のようなはっきり言ってしまえば部外者の人間がこんなことを言うのはおせっかいであろうし、今後このセミナーが一つのムーブメントとなった暁には改善されていく問題であるとは思っているが思い出したのでここに書いておく。何故その自分の中の日本的な部分を意識した時に上記のことを思い出したかというのはあくまで言動は右往左往しようとも常識人でいたいと常日頃から意識しているのだが、その常識はあくまで日本的なものであるということに同時に気付いたからである。それに気付いてから前回からのモヤモヤは一掃された。しかし新たな互いの文化を無視して真の意味でのトラウマ解決はあり得るのだろうかという疑問が生まれた。分かりやすい事例で言うと日本で言うと死んだ人は総じて仏さんであるが中国では違う、これは言葉にしてしまうと簡単な話に見える、しかし靖国問題に関すれば問題を起こしているのはお偉いさん方たちではあるが一般的日本人がなんで中国はそんなことに怒っているんだろう？となってしまう一因になっていると思っている。だからなんだと言われればなんとも言えないのだが、中国側から出た尊厳の無い謝罪はいらぬという言葉や前回感じた温度差はそこに繋がるのではないかと感じた。このセミナーの存在自体がそういった文化や歴史といった互いに知り尽くす理解し尽くすことが不可能な部分を埋めるために感情の表出といった心理学的な手法を使用していることはあくまで理解した上で書かせてもらう。

批判的なことばかり書いているのでこいつ極右じゃねえかと思われたかもし

れないが、私自身はこの試みが本当の意味での日中関係の回復の大きな第一歩になって欲しいと切に願っているし今回も私自身大きな収穫を得ることができた。それはこの難しい問題を通じた上での同世代の同じような学問をしている人間との出会いであり交流である。留学生の方々とは何度か話し合ったりしたことはあるが生の声を聞けるとやはり全然違った収穫や自分自身の問題に気付くことが出来た、また少しではあるが文化も理解できた気持ちにもなれた。

セミナー後の話であるが前回からの疑問である今こういった段階であるのかを尋ねたら、今回でやっと一歩、承認の段階ということを知ることが出来、私自身も同じことを感じていたのでこれからの進歩への期待と共にこれからも出来る限り参加していきたいという願望も強くなった。

最後に、浅学な若輩者ですが二度目の参加を本当にありがたく思っております、関係者各位へ厚くお礼申し上げますと共に筆を置かせてもらいます。

## 「南京を思い起こす 2011」の感想文（翻訳）

南京師範大学心理学院

藤川

私は中国人です。南京現地の人ではありません。私にとって、「南京大虐殺」はただ教科書の上で言う日本が中国を侵略した戦争の一部です。私にとってこれが何を意味するのか、考えたことは少なかったです。私は南京に来て大学に入り、気が付いたのは、「南京大虐殺」はこの都市でなんだか忌み嫌われる話題だった、ということです。しかし、それは私にとって依然として“過去”に等しい名詞でした。人々はよくこの話題を忌み嫌いますが、やはり自分とは関係ないことと感じます。“南京を思い起こす”のセミナーに参加した後この（次の）ような感覚がありました。「もともと君はここにいる」という張愛玲の小説の言葉のように、南京大虐殺は決して私の周りから離れることはないのに、私はただそのことに一度も気づいていないのです。

日本人に対する私の態度は複雑です。小さい時からの教育で、私は根強く日

本が中国を侵略すると感じています。以前は戦争の侵略で、今は経済侵略です。日本の右翼が中国を非難する時に、私は少しのためらいもなく中国人の立場に立って、本能的に日本人の反対側に立ちます。しかし客観的に言えば、私は日本の製品を好みます。彼らの民族精神を尊重して、心から日本東北大地震の死者のために悲しみます。この二つの感情はもつれあっていて、実際の世界を深く見ると、しだいに私は教科書のことを完全には信じなくなっていて、もうあの狭いナショナリズムの波に身を投げなくなっています。私達は誰かに傷つけられ、その人を傷つけたことがないだろうか？同時に、私は中国人として、自分の祖国を愛しています。私は祖国の一員として、誰かが祖国を傷付けると、本能的に祖国を保護して戦います。私が大きくなる間に、この二つの感情が併存していたので、ずっと何もないと感じるようになってきました。多分潜在意識が自己対立を合理化するために、私達の解決することができない問題を軽視するということが選ばれたのでしょう。

“南京を思い起こす”のイベントに参加したとき、アルマンド教授のドラマのシーンで、私の心の中に埋もれている感情の声を聞くように言われました。私ははっきりそれらの流れを感じることができます：無視一心を開く一気づく一闘争一直面する一受け入れる一転換する一統合する一穏やかな状態。私はこれはどちらかを選択する問題ではないことを理解し始めました。私ができるのは心の中で共存させることです。この2種類の感情が何であるかは、すでに重要ではありません。重要なのは、それらの存在に対して私が泰然と構えることができるということです。最近、日本の友達と付き合いようになって、私達と同じように生きている生命を心から愛しています。私は身をもって、人の心の柔和で温かい心を経験し、それらが2つの国家の間の固い氷を融解させるエネルギーを注ぎ込むことを望みます。

最後に、私がすべての人に対して言いたいのは：メディアが私達に見させているのは、たぶん彼らが私達に見せたいことです。中国でも、日本でも、すべての戦争は少数者の利益を満足させるために、大部分の人の幸福を葬り去りました。どんな状況にしても、生命は尊重するべきでそれは資本主義、軍国主義それとも共産主義の名義に関わらず（南京大虐殺は生命と人間性に対しての冒涇で、それを承認することを望んでいるのであればはまた生命と人間性に対して

の冒涇です) たくさんの善良な日本人は戦争の罪の悪意を背負って、彼らは懺悔して、またしようがなく、彼らの努力が承認することができるのを望んでいます。これも生命と人間性に対して一種の防衛です；世界のいかなる場所においても再び“南京大虐殺”のような事が発生しないことを望みます！

## 「南京を思い起こす 2011」の感想文

立命館大学映像学部 3 年生 (記録・撮影係)

和田慎太郎

私は今回、カメラマンとしてセミナーに参加させていただき、4日間のワークと、参加者の人々を、カメラを通して見つめていた。この体験を通して私は、カメラマンとしてこのセミナーに関わることで、自分自身の心がどのように動くのか、またどのような苦悩を抱えるのかということを考えていたが、先輩の土井亨カメラマン（彼は2007年の「南京を思い起こす」に参加している）が以前おっしゃっていたことの意味が徐々に分かるようになっていった。中でも「カメラを持つ自分が、銃を構えている日本兵の姿と重なった」という氏のお話は重く心のなかに残っていた。

撮影を進めてゆく中で、私は人にカメラを向けるという自身の行動に対して、罪悪感や申し訳なさ、そして後ろめたさのようなものを強く感じていた。カメラが人と人の間に存在するということが、その空間の意味や両者の関係性は大きく変わる。普段表に出すことがない心の内に秘めた思いや、悲しい記憶、ありのままの感情を表現し、他者と共有するという今回のセミナーにおいて、カメラを持って撮影を続ける自分自身が、ひどく軽率で、残酷な存在であるように思えた。そのなかで、撮影し記録することが私に託された最大の使命であると自分に言い聞かせながら、私は映像を撮り続けた。一方で、このカメラの存在が、私がここに居る意味でもあるとも思った。

南京事件の生存者の方のおはなしを聞く中で、私はカメラを回しながら涙していた。撮影中に被写体に感情移入して泣くといったことは、本来カメラマン



としてはありえないことなのだろうが、私は溢れ出る感情を押さえることが出来なかった。

感情移入しすぎれば私は冷静な視点を失うのではないかと危惧する反面、第三者としてテレビを観るように被写体に接することもひどく冷酷であるように感じられた。どちらかと言えば後者の姿勢を基本に撮影していた私は、自分自身のありかたや振る舞いに矛盾した気持ちを抱えながらセミナーに参加していた。

何よりも嬉しかったことは、参加者の皆さんがカメラを持った私に、特別視することなく接してくれたことである。私がワークの中に入って行ってカメラを回すことを自然に受け入れてくれた参加者の皆さんの心遣いに本当に感謝している。

最後に、セミナーの中で一つ、とても印象に残っていることがある。私は記念碑に花を手向けたとき、青く美しい蝶が飛んでいることに気づいた。その時はさほど気に留めなかったが、帰り際に長江の畔で記念写真を撮ってもらったときに、偶然似た蝶が羽ばたく様子が見事に写真の中に写り込んでいた。

後に知ったことだったが、蝶というのは、世界の各地で人の死や魂に関連した存在として語られることがあるという。きっとあの青い蝶も、私たちに何かのメッセージを伝えに来てくれていたのかも知れない。

私はいま、南京で学んだことや感じたこと、考えたことを日本のいろいろな人に話したい、伝えたいと強く思っている。

---

| 18

## 国際セミナー「南京を思い起こす 2011」交流活動の感想文 (翻訳)

南京航空航天大学

王柯

私は南京で日本語を学ぶ一人の学生として、今回の交流活動に参加することができ本当にうれしいです。今回のイベントの中では、異なる戦争体験と教育

を受けた中日双方が集まり、一緒に中日の戦争と南京大虐殺の歴史を学びます。すべての人が心の扉を開け放して、お互いに相手の心を深く聞きます。

ごく短い4日間で、私の認識と観念に極めて大きな変化が発生しました。特に南京大虐殺のことについては以前はただ教科書とメディアから得た情報でしたが、今は更に深く、事件の生存者および戦争の参加者の後の世代も影響を受けているという認識があります。また、ワークショップという斬新な形式で、戦争の傷を癒すための対話をするのは、私は以前に経験したことがありません。

続いては今度のイベントに参加した感想および私が受けた啓発です。まず、私は南京当地人ではありません。だから南京大虐殺のこの歴史について、私が持っているのはただ教科書とメディアから得た情報です。南京大虐殺について1つの全面的で、系統的な認識がありません。今度のイベントに参加するため、事前に私もたくさんの資料を収集して、図書館で南京大虐殺の史料に関して本を借りました。特に張純如先生の本は私をとっても大きく揺り動かしました。この作者は詳しい歴史史料と実際の取材によって、あの残酷な歴史を再現しました。同時に人間性に対して探求を行いました。読み終わった後に、私は深い嫌悪を感じて、目の前の日本語と関係がある本をすべて捨ててしまいました。そして私は自分が勉強した日本語も嫌いになりました。また、日本人についても、本当に人類がそんなに残忍な事をしたのか、想像できません。その行為は本当に“鬼”とすることができるのです。人間性は本当に複雑ですね。私はそう思います。

今度のイベントでは幸運にも夏淑琴おばあさんが彼女の南京大虐殺の中で幸いにして生き残ったという経験を聴くことができました。教科書で見ると自分で自ら感銘を受けるのとでは完全に違います。夏おばあさんのあのような楽観的で強靱な生活態度に私は特別大きく揺り動かされました。私を特に感動させたことは、あの大きな大災難の中で生きていくのは容易なことではなくて、とても苦難に満ちていたことなのに、おばあさんは強く積極的にその後の人生を送ります。このような堪え難い災難は、もし私ならば、強く生きていくことができるかどうか、思わず考えてしまいます。ここから今の自殺率の高い社会問題まで思いを巡らせると、中日両国にもこの問題がひろがっていると思います。日本

は更にひどいです。世界でどんな苦境があっても、自殺するとどうにもなりません。夏おばあさんが述べることを通して、私は彼女の日本人に対しての寛容さを感じます。しかし日本国内の右翼は彼女が南京大虐殺の偽証人だと中傷しました。彼女はこれに直面しています。彼女は憤怒して、法律を通じて自分の正道を求めます。私はこのような生き方を非常に敬服します。たしかに、このような時の態度は必ず強硬にならなければなりません。歴史を否定する人は必ず自分の代価を払わなければなりません。

中日双方は南京大虐殺のこの歴史について、チームの形式でいくつかの深い討論を行いました。私も日本の声に耳を傾けました。謝る意と許しの意、私は一人の中国人としてはそれを受けることができないと感じました。つまり私は戦争の中で死んでしまった人を代表することができないのです。しかし私は日本人の友達のあのようなお詫びの気持ちを理解できます。日本国内の右翼勢力がいつの日か南京大虐殺事件について心からのお詫びの意を伝えることを望んでいます。

時には私も一種の無力感を感じます。この問題について、政府の努力も必要だと思います。今、国内はこの点についてはあまり重視しないので、私は本当に残念だと感じるのです。個人の努力はとても小さくて、中日両国の間の和解と民族間の矛盾の解消について、焼け石に水であるに違いありません。将来は中日関係の研究および中日友好の交流のイベントがだんだん多くなるよう促進することを心から望みます。

今回日本から来た日本人の友達、私は非常に彼らに敬服します。彼らの分かち合うことを耳にして、私は彼らが本当に勇敢だから、思い切って自分の内心に向かい合って、歴史問題を正視しているのだと感じています。同時に、私も南京大虐殺の歴史の見方について日本人と相談しました。日本政府に一定の責任があって、教科書の問題の上に歴史を歪曲する嫌疑がかかって、侵略事実を承認しません。

その他に、ワークショップの形式はとても斬新で、相互に感情で交流するのはとても役に立ちました。特にドラマセラピーとプレイバックシアターの方法では、私達が一緒に過去を乗り越えて、感銘、思考することができます。その中でも一番印象深いのは中日双方のお詫びの意を伝えて、それを受けるかどうか

かというエクササイズです。ある男性の日本人参加者が中国人の生存者の立場に立って発言をした時は、本当に驚きました。その他の人の発言と思考も同じく私は長い間忘れることができません。

戦争は本当に残忍な事です。普通の民衆は其中で最も不幸です。彼らは仕方なく戦争を迎えて、またどうしようもなく戦争が持ってきた結果を受けます。歴史が残した問題について中日の双方は1つの明確な説明と認定を心から望んでいます。日本の右翼は依然として断固に南京大虐殺が発生したことを否定します。多くの中国の若い人は大量に日本の漫画とドラマに接触して、日本の文化について好感があります。しかし南京大虐殺のことを言うとやはり怒ります。憎しみを取り除くのは難しく、中日の間の友好関係は双方共に努力が必要です。

一人の日本語を勉強している中国の青年として、私も肩の上に負った重い責任を感じます。将来どの種類の職業に従事するのであろうと、私は必ず中日友好交流のために努力します。

---

## 19

### 「南京を思い起こす2011～戦争のトラウマと和解修復の試み」 に参加して

渡邊佳代

今回は3回目の南京訪問であった。1回目は2007年の国際会議、2回目は2009年の国際セミナー、そして今回である。「南京訪問を通して、何が変わりましたか？」と今回の中国からの参加者に尋ねられたが、それは戦争の加害と被害について、より深く自分や立場の違う他者の感情を感じられるようになったこと、そして日本の加害をより身近な問題として感じられるようになったことである。

私には、腕の怪我から戦争に行けず、生涯悔やみ続けた父方の祖父と、満州で軍曹をしていた母方の祖父がいる。どちらの祖父も亡くなってしまったので、どういう思いで戦時中と戦後を過ごしたのか、本人たちに直接尋ねることはで

きない。特に母方の祖父には、右大腿部に弾丸を埋め込んだまま、何故無事に帰ってこられたのか、何故軍曹にまでなっていたのか、満州で何をしていたのか、尋ねたいことは山ほどある。母方の祖父は幼い頃の私にとっても優しく、誰にでも公平で、困った人がいれば自分の身を削ってでも助けるような人だった。その祖父が「戦争は怖い。勝ったほうが正義になる」「戦争中、日本人は中国人にひどいことをしたんだ」と言った言葉が忘れられない。祖父はどのような思いでその言葉を私に伝えたのだろうか。そうした思いから、戦争について関心を持ち、国際セミナーに参加し始めた。

3回の訪問を通して、毎回の私のテーマは変化していった。1回目の訪問の時は、南京で起こったことを実際に目にすること、何が起こったのかを知ることだった。だが、記念館での写真や生存者の証言の壮絶さに圧倒され、中国の方々の思いを受け止めようとすることに精一杯で、私がそこで感じたことは、「絶望」だった。帰国後も絶望を抱えながら、祖父は非人道的なことはしていないという証拠を必死で探しているようだった。

2回目の訪問でのテーマは、心を開いて他者と交流すること、自分や他者の思いを十分に感じることだった。アルマンド・ボルカス氏の HWH に参加し、絶望の中で他者とつながることで「希望」を見出そうとあがいていたように思う。HWH の表現アーツを用いて、中国の人たちとともに感じ、それを表現し、十分悲しむことから、2回目の最終日の追悼式では、ようやく日本人の加害が祖父に重なって感じられた。その後も様々な文献を読み、祖父がいた満州で起きたことを少しずつ祖父とつながって考えるようになった。中国で祖父がしたことには、私にも何らかの責任があると感じている。自分が実際にしたことではないことに、どう責任を取るのか、どう謝罪することができるのか、今回のテーマだった。

セミナーは毎回メンバーが異なるが、中核メンバーが同じであることや、日中ともに何人かのリピーター参加者がいる。今回は40人という大所帯でのワークショップのため、十分交流できるだろうか、表現できるだろうかと少し不安だったが、アルマンドのファシリテートや、日中のプレイバックたち、そして先輩や仲間たちの存在により、より深く幅広い感情と向き合うことができたように感じている。どんな感情も安全に表現される場の保障や温かいサポート

があることで、自分や他者への共感が深まり、安心して自分や他者とつながることが可能になったように思う。

例えば、HWHを通して気持ちのプロセスが進み、「ごめんなさい」だけではない複雑な感情（怒りや不信感、無関心、嘲り、無力感、孤立感など、「傷つき」から派生した感情）が自分の中で蠢いていることを強く感じた。それは日本で戦争のことを知ろうと研究会に参加したり、活動が続ける中で、自分に向けられた否定的な感情に抵抗しながらも、知らないうちに吸収してきた感情のように思う。セミナーで表現することが躊躇われるような否定的な感情や裏の声も、アルマンドは安全に表現する場を保障してくれた。サイコドラマで中国の椅子、日本の椅子という舞台を設定することで、それぞれの表の声と裏の声は安全に表現された。先輩たちの中にもある傷ついた声を聴き、それでも活動を続けていることに希望と感謝を感じ、そして深い悲しみと痛みに共感した。また、自分が表現した葛藤や悲しみ、傷つきに対しても、新しく参加した後輩たちや中国の方々を受け止め、それを表現しようとしている姿からも励まされ、私の支えになった。

どんな感情も声も、出口を求めて表現されることを望んでいる。互いの率直な思いや感情を身体レベルで表現することは、言葉だけで対話するよりも表現の幅は広がり、より深く共感する場が形成されていったように思う。2日目の中国の椅子、日本の椅子の舞台で、私が日本の声として上げた「私のおじいちゃんが、あなたのおじいさんを殺したり、おばあさんを強姦したかもしれません」の言葉は、プログラムを終えた今でも私の心に深く刻まれている。

前回までに感じた「絶望」と「希望」の他にも、様々で複雑な感情を抱えながら帰国したが、そこには私の母や祖父に対する裏切り感や後ろめたさ、罪悪感も含まれていた。私にとって大切な2人を傷つけてしまったのではないかと恐れていたからだ。中国の方々が最後に表現して下さった日本人にしてほしいこととして、「知ること」「行動すること」などあったが、今回帰国して私がまずしたことは、祖父の兵籍簿を取り寄せることだった。それには様々な書類と手続きが必要で、母と向き合わなければならなかった。

私が祖父の足跡を辿ることを母は「あなたがじいちゃんの心に思いを寄せていること、じいちゃんは天国で喜んでいると思うよ。じいちゃんのことを後の

世代に伝えていくことも、じいちゃんの性格だもの、自分の体験が後世の役に立つと思えば、じいちゃんも喜んで自分を差し出すと思うよ」と言ってくれた。硬くなっていた心がほどけていくように感じた。セミナーへの参加を通して、家族のプロセスも少しずつではあるが進んでいる。

母方の祖父のことは私の中で少しずつつながってきたが、一方で手つかずの父方の祖父のことがある。今回のセミナーで感じたより複雑な感情は、父を通して伝えられてきた戦争に行けなかった祖父のことが関係しているようにも思える。よりチャレンジングな課題に取り組んでいくことになると思うが、どんな感情をも恐れず、セミナーで感じたつながりと温かさを支えにして、プロセスを続けていきたい。それが加害者の子孫としての責任だと、今のところは感じている。

---

20

## 「南京を思い起こす 2011」の感想文 （翻訳）

袁曉菊

南京から帰って、もう一ヶ月経った。今回のワークショップが印象に深く残った。その中の一つを皆にシェアしたい。

中国人参加者の1人は子ども時代と青年時代の経験を語ってくれた。彼女は日本で生まれたため、母国の中国に帰って、学校に行くときいつも学校の仲間に嘲笑われた。仲間達は彼女に指差して「小日本鬼子」と言っていた。Armandに「その時仲間達に言いたいのは何ですか」と聞かれた時、彼女は「傷ついた」と言いたかったと答えた。その後、家族が日本との繋がりががあるので、学校の先生にあなたの家族が悪いからあなたは学校に来る資格がないと言われた。今の気持ちがどうだと Armand に聞かれて、彼女は本当に不公平だと語りながら涙を流した。

このような場面を見て、まるでお父さんの子供時代に見えるようだった。小さい時の仲間に嘲笑われた時、無力的に「傷付いた」と言ったり、学校の先生に「あなたの家族は日本との繋がりがあからあなたもう学校にこないで」と

いわれた時、「これは不公平だ」と言ったりする様子が見えた。お父さんの悲しみが見えるようになった。彼の無力な反抗、この社会の不公平に対する反抗が見えるようになった。まるで自分も時空を超えて、お父さんと一緒にその時の辛さを体験し、彼が遭った嘲笑い、その時の不公平を経験したようだった。

当時 12 歳のお父さんはいかにこのような不公平に反抗すればいいか、きつと分らなかっただろう。お父さんから語ってくれたストーリーがこのように起きたのだろう。もしも、それが私自分の経験であれば、もしも、私がその不安な文化大革命の時に生まれていたら、社会からの圧力をどう担っていけばよいただろう。私の気持ちがどうなるだろうか。こんなことを思いつつ、すごく悲しくて、涙が流れた。

このような悲しみがずっと彼の血の中に流され、お父さんになってもずっと影響されている。お父さんは私の勉強に対して、厳しかった。子供時代、テストを落としたとき、お父さんに見せるのが怖くて、お父さんの真似をして、自分でサインしたことが記憶の奥に残っている。見せればきつと怒られて、罵られると思って、責められることが嫌なので自分がサインした。今、この場にいる私は、昔理解できなかったことの答えを全てワークショップの中で見つけた。私によい教育を受けさせ、彼の子供時代の憧れ、実現できなかった夢を私に果たそうとさせたわけだ。

彼は彼が思ったよい方法で私の未来を計画した。例えば、これからどこに進学したり、どこで働いたりすることだ。しかし、私が就職する時、中国の計画経済がもう潰され、お父さんの変わりにお父さんの前の仕事をして、一生その職場で働くことはもう不可能になったので、計画してくれた未来が実現出来なくなった。「よりよい生活をあげられなくて、悔しい。」と父さんはいつも言っていた。

お父さんはこのように日常生活で彼の経験を私に伝えた。もちろん、全て私は受け入れた。他のこと全て重要ではないと思うけれども、今の自分を見ると、成績も良くなくて、セルフマネージメントもできない。全部分ってるのに、変わるのが怖いと思う。受けるしかない。自分も弱みを。

もう一つ印象に残ったのは、二人グループになって、1人は私に「ごめんなさい」と言って、私は「許さない」と答えると言うワークだ。私は「ごめんなさい



い」と言った時、1人の友達のことを思い出した。友達は私を歓迎するために、長い時間を費やし、美味しい料理を作ってくれた。美味しそうな料理が目の前に出され、作り方を教えてくれた時、私は「レストランに行けばいいんじゃない」と言った。私のための努力が全部私によって否定された。友達に「許さない」と言われた。友達の悲しみに気付いた私は「ごめんなさい」と言って、友達が「許す」と言ってくれた。その時の私は釈然とした。

今回のワークショップで、私は心を全部開いて、皆言ったこと、やったことを素直に感じていた。気持ちも冷静から沸騰、そしてまだ静かになるように繰り返していた。過去の痛みと悲しみがあるのは当然だけど、今の私たちは過去と現在を結びつけ、ちゃんと整理することも必要だと思う。こうした私は未来が見えた。お父さんに対する理解が出来た。まるで周囲の力に囲まれて、私を力いっぱいもたせてくれた。今回のような「歴史のトラウマを癒す」ためのワークショップに心から感謝する。

## 21

### “南京を思い起こす 2011” セミナー感想 (翻訳)

張帆

セミナーが終わり、8日の夜の食事会のとき、最初と違う雰囲気を感じた。国籍の違う若者が親友のように冗談話までしていた。食事会の後、みんな湖の畔でギターを弾きながら、うたを唄ったり、思いを分かち合ったりしていた。別れが迫ってきたとき、寂しい気持ちが胸いっぱいになった。この四日間、ワークショップのおかげで互いに心を開き、よく知りあうことが出来たからだと思う。セミナーの終わりに、痛々しい歴史のトラウマから抜け出せ、気分が明るくなった。これまで、みんな友好的な雰囲気で話し合ってきたけど、礼儀正し過ぎて、間の距離感がずっと存在しているような気がしていた。今の雰囲気はいいスタートではないかと思う。本当の意味での交流は互いがよく理解した上でなければ、交流を妨げる壁はいつまでも消えないと思う。正しくない情報を受け入れたら誤解が生じ、そして積み重なり、結局心が指のまめのようにだんだ

ん固くなってきて、無関心になってしまう。今回のセミナーでは戦争によるトラウマを癒し、互いの理解を促し、日中両国の国民が理性的な態度で歴史を見ることが出来、そして平和の為に頑張っていくことに、とても意義があると思う。ではこの四日間の感想を整理させていただきたい。

今まで私は歴史問題を避けてきた。日本軍に対する憤慨と憎しみ、遭難した中国人への哀悼、当時の国力が弱いからいじめられた中国に対する恥、「日中友好」という理念に対する迷い、一部の日本国民の心を込めた謝罪行為への感動、日本民族の吸収力、勤勉さへの関心。すべての感情が絡まると、どうすれば良いのか戸惑ってしまうからだ。7日のプレイバックシアターで一人の参加者のストーリーに、とても共感できた。彼女は私も感じたけれどなかなか口にできなかったことを話した。憎しみに盲目な崇拜は極端な両極であり、私たちはいつもその間に揺れている。二つの声が喧嘩している。どちらかの観点到賛成すると、反対側の敵になる。中立な立場に立っても、批判される可能性がある。白か黒かと判断するのではなく、歴史と現在の境界、政治と人情との境界、同じ民族でも違う観点を認識し、融合することを期待している。

アルマンドのドラマセラピーについて。最初の頃、感情を表現するのに慣れず、演じることに抵抗感があって、自分を開いて演じることが難しかった。自分の中からこのような叫び声が聞こえた。「どうして演じなければいけないの？どう演じた方がいいの？ムリ！早く終わってくれ！」ウォーミングアップがあったとしても、難しく感じた。緊張と不安で、自分の感情を自由に出すことがとても難しかった。それを意識すると、また不安と自分を責める気持ちになった。心理学を勉強しているので、ワークショップの中の自分が感じていることを分析してみた。自分が感じることを抑え、隠すことが習慣になっている。そして感じたものを避ける。その後のセッションで、とてもすてきなパートナー、中国プレイバックシアターのジャネットさんと存さんに出会えた。彼らの感情あふれる演技に感動させられながら、私も自然に役に入ることが出来るようになった。「リラックスして！」「あなたなりのやり方で感じたものを表現してみてください！」と励ましてくれた。彼らからパワーをいっぱい頂いた。深くまで触れていないと思っていたのに、最後に存さんとロールプレイングのとき涙が止まらなくなった。セミナーが終わるとき、ジャネットさんは「あなたはとても

いい性格を持っていて、自信を持ってる人だと感じます。」と言ってきた。彼女の話聞いて、心の中の何かが動かされ、「いいえ、実は全く自信をもってませんよ。」と答えた。すると、ジャネットさんは私を抱きしめて、こう言った。「自分のことを信じてください。あなたが思っているよりずっとよく出来ているよ！」涙がでるほど感動した。彼女からいただいた言葉は、これからずっと忘れることはないと思う。思い出すたびに、パワーをいっぱい貰うことが出来る言葉だった。

6日のワークショップに参加できなくて、とても残念に思った。アルマンドと綾さんから、南京大虐殺生存者の証言に耳を傾けることがとても重要な体験である、と教えてもらった。でも今回は聞くことができなかった。生まれ育った時代がその事件から70年も経っている為、私の親と祖父の世代から戦争についての話は一回もされたことがなかった。すべての情報は映画やドラマ、教科書などから貰ったもので、憎しみや怒りや恥や痛みを感じることはあるけれど、トラウマまでにはならないと思う。ただ日本は歴史を否認したり、中国を侮辱する言動などが耳に入るとき、怒りを感じる。それも真心を持って謝罪に來られた優しい日本人の前に、憎しみという感情が消えてしまう理由の一つだと思う。

7日の午後、羅先生のアイデンティティのマップをサイコドラマに演じてもらったセッションで、あの時代の人はどう感じていたのか、より深く理解出来るようになった。親と家族から戦争からの影響について聞いたことがないので、ほとんど知らなかった。サイコドラマで日本と中国の狭間で生きていた子どもの時の先生が受けたトラウマを見て、彼女の経験はその時代の人々の生き様の反映だと思った。そして日中の和解に力を尽くしている羅先生の努力にも感銘している。

8日に、参加者一同で燕子磯の遭難者記念碑へ行ってきた。記念碑の裏に書かれている文を読むと、その当時の場面がまるで目の前に見えるように見えてきて、涙があふれていた。日本人も碑文の通訳を聞くと涙が止まらなくなった。彼らの気持ちは理解出来る気がした。歴史事件として過去に存在しているのに、色々な理由で真相が見えなくなるからだろう。祖先が犯した罪が目の前にあり、心の中ではどれだけの衝撃を受けているのだろう。儀式が終わり、日中の参加

者が一緒に記念写真を撮り、抱きしめながら話していた。このシーンを見てとても感動した。「このままでいたら良かったのに！国民はみんな和解と平和を望んでいますね！」と心の中で声が沸いた。

8日の午後、椅子を使うセッションで、色々考えさせられたと同時に、「残酷」なところもあった。日本右翼の言論のような声が耳に入ってきた。日本側の参加者が言ったものは、彼らが日本で聞いたものそのままだろう。日本人は政治に加工された情報をもっているのだから、彼らが聞いたことはすべて事実ではない。しかし同時に、私たち中国人が知っていることも本当に真実なのか、と不安を感じた。とても強い力が国内のすべてをコントロールしているので、何が真実なのか何が偽りなのか、分からない時代になっている。今回のセミナーで、国民の怒りと憎しみは社会の情報による誤解からきたものだと分かった。深く理解しあつた上で無ければ判断しないようになった。アルマンドは真ん中の椅子を外し、日本と中国を直接向かい合わせ、他の参加者に自分が賛成する側に行くよう指示した。日本側と中国側はそれぞれ何を感じているのかとても共感出来る。日本側の日本人は歴史を認め、心を込めて謝罪し、そして平和を望んでいる人たちだと分かっている。中国側は真実が認められることを望んでいて、日本人を理解しようとしていることを、私も分かっている。しかし、中国人として、私は中国側のほうに行くしかない。中国側の力が弱くならないようにしたいから。アルマンドは中国側に立っている方に、「被害者」として「加害者」の日本側に何をして欲しいかと聞いている時、私はその場から逃げたい気持ちだった。向う側に立っている南京セミナーの日本人参加者は、どれだけ優しい方々だろうか。もう謝罪しようとしているのに、なぜやらせなければいけないの？直接中国人を傷つけた人ではないのに、本当に残酷な場面だったと思う。最後に、アルマンドから自分のやり方でこの「対峙」の場面を終わらせる指示が出されたとき、私たちは抱擁と握手の形にした。実際に私たちが互いに戦争の影から抜け出し、今のように親密になれよう願っているのではないか。

## 耳を傾けトラウマを理解するー 2011年南京国際研究会の心理プロセスの感想（翻訳）

広州市教育科学研究所

郑春晖

2011年10月4日ー8日間、私は演技者と参加者として、「南京を思い起こす2011ー歴史の傷を癒し、平和構築」の国際セミナーに参加できて、本当に嬉しい。中国同声同戯劇団のメンバーとして、日本の劇団PLAYBACK-AZの方々と一緒に皆の心の底からの物語を聞いて、演じて見せてとても幸せに思う。家族の歴史と国家の歴史に近寄って、リアルに日本の方々々と突き合ってから、虫の知らせの不安で侵略者と漫画なんてまとまりのない印象に温かい思い出が取って代わった。これからセミナーの感想を説明する。

### （一）氷が解け

セミナーの前に日本の方と付き合うことに好奇心を持っていた。この民族は、私達と見た目が同じだが違った文化を持って、もし南京ではなく他の地方で会えばどんな感じがするか分からない、ただ外国人だろうと思う。しかし中国人に対して特別な意味がある南京で会って、日本人はただの外国人ではなく、昔の敵だ。

日本人はどんな感じって、南京に来る前に何度も自分に自問した。

恨みを抱いていないが、今の私に歴史は遠く離れたもの。

恨むことなんてできないって理知が教えてくれて、それは以前の事で、更に先代、先々代のことで、戦争は避けられないことだ。

ドラマを演じる活動の初めに、アルマンドさんは劇場ゲームで雰囲気盛り上げて、たくさんの方がちょっとはずかしくて新しい環境に順応して周りの人を見つめたみたいだ。でも日本の方が私たちよりもっと良い表現力があって、四角四面な印象を打ち破った。

これから、楽しみに始める。

## (二) “わたしを許してください” “あなたは私を傷つけた”

ロールプレイングの後で、「お許してください」、「傷つけられた」の2つのセンテンスが胸に浮かんだ。仲間のある人はまだこの環境に順応しなかったが、ずっと遊んでいた。でも早く役柄に成りきるために――南京虐殺どうしてここにいるって自分に言っていた。

「傷つけられた」の方を初めに試してみた。このセンテンスはパイプのように気持ちを引き出して、苦しみを体得した。「お許してください」を言っている人が向いてくれるとき、後に下がって、見たくなかった。その時、この感じが強くなった。彼に合うと昔の暗黒な記憶が思い起こして、がたがた震えながら退いていた。

目を閉じて、現実と隔絶するか過去とするか分からない。

目を開いて「お許してください」を言った真誠な少年を見て、彼が私の涙のため不安になって、更に近寄る勇気がなかった。彼の澄んだ目付きが私を引き戻して暗黒な時代から戻った。でも「傷つけられた」は壁のように少年が私に向かって行くことを阻んでいて、ずっとお詫びするものの。

彼の謝罪をもらいたかったが、これは活動の第一項練習のため、絶対あくまで意地を通そうとしようと思って、この壁で断った。被害者の苦しみと恨みが見られなければならないと思う。ロール交換。相手がどうしても謝罪を受け付けないことに対して私は無力感があった。何をすべきだって全然分からなく、ひいては諦めようと思って、でも負い目を感じた。微妙な気持ち。それは和解が欲しい日本の友人の考えだ。その瞬間、彼らはもう少し理解ができたみたいだ。

## (三) 共感する場

事務所での活動の一部分は：皆、輪になって立つ。司会者が言ったことは自分の状況と似ている時、前へ一步を踏み出してください。

質問：中日戦争に参加した人をインタビューした人

家の中に中日戦争に参加した人がいる人

○ ○ ○ ○ ○ ○

ある質問はこのようなです：その歴史は家で提起されていない人。

その時、踏み出して来た人は非常に少ない。私が歩いていった。

うちの家族の二代は戦争に参加したどころか、普通の兵士、戦争の指揮者、政策の執行者、記者、秘密仕事を従事した人に至るまでとして、違う身分で戦争に入りました。直接に聞いたことがなかったですが、その後の資料の中から了解しました。その歴史を持っているお年寄りは相次いで亡くなってしまいました。お年寄りが亡くなるにつれて、家族の血液に属する一部分は歴史に埋められました。どうしてそのようなストーリーを言われなかったのですか？どうして弁が立つ私たちは自分を表しにくいのですか？私たちは緊急に救助できる彼らのストーリーがいったいどれくらいあるの？

共鳴圏には、これから、もっと思考、もっと行動が要ります。

#### (四) アイデンティティ

これは簡単な練習—私は〇〇国の〇〇です。

ずっと自分の国で生活しています。外から自分の国に対してのコメントを聞いたことがあります。そのコメントはいい言葉もあれば悪いものもあります。しかし、いい言葉は過去のものだけ、現在に対しての評価は決していい言葉ではないです。

中国人として、誇りというか、卑屈というか、言にくいですが、私はほかの人に馬鹿にさせない中国人になると胸の中には明確な信念を持っています。

中国の大陸人としての身分は香港人と付き合う時に、はっきり現れてきました。その時の感じがすごく複雑です。香港の制度とある領域の発展は中国の大陸よりよくて香港に学ばなければならないのですが、ある一部分の香港人は他よりも優れている感じがして知合いの友達にしても違和感があります。例えば、物事を話し合う時、我が香港は何何何。。。。、我が香港は何何何。。。。

大陸の民主は、潜在意識の中に話し合わない話題です。高低があるわけではない。ただ私たちは受けた教育が違いますから。すごく文明を持っている民族は文明の仕種を捨てたくないで文明の道への困難に耳を傾けたくないです。一方、自らの野蛮を良く分かっている民族は超えられない文明の前に自分の頭を下げたくないです。ただ自らの文化と文明に懸念しています。価値観についての問題に触れたが最後、たとえ双子だとしても一瞬にしてバラバラになりま

す。

この練習をする前に、身分承認は私にそんなに大きなショックをもたらすのは一度思ったことがあります。私は誰？どこに属するか？所属した群れは社会の中の位置が深く影響を与えたことを良くわかりました。このような特定の時に、このような練習に接触しました。平和と和解のために中国に来る日本人を尊敬します。彼らは試しに歴史を了解して直面します。その勇気に敬服します。

この練習をする前に、中国の香港から来た友達と付き合いしました。かつて、私たちは一緒に仕事をしたり歌を歌ったりしました。言語と文化の障害がなさそうです。

にもかかわらず、彼は、外国では中国人だと認められますが、中国では外国人の通道を歩きます。このような区別を彼は理解できません。

#### (五) 一緒に物語を作る

事務所での活動の一部分は二人を一組として物語を作ります。物語の内容は背がちょっと低い日本人が中国人と出会ったことです。

パートナーと一緒に作った物語はありのままに描きます。日本人はますます大きくなる時、死に近い中国人と出会いました。救いたいんですけど、その中国人が許せません。そのあと、この中国人は意識不明になって救われました。中国人はすごく迷っています。もし日本人を許したら、家族に裏切られました。だから、まず、その日本人を受け入れることを決定しました。それから、家族のみんなに紹介します。世の中にはいい日本人もいることを家族の皆に分らせるように。

#### (六) 対話 1

驚いたことに、今日の対話を通して、日本側の方々が歴史に直面する勇気、そして我々がそれぞれの政府の不作為なことが明らかになりました。会場には向かい合って椅子が二つ置かれてありました。Armand さんの話によって、この二つの椅子は中国人と日本人を別々に代表します。国籍に問わず、誰かがどれの椅子を選択したことは、実はこの椅子に応じた立場に立って発言することを意味します。はじめ日本人が出て、「日本人」を代表した椅子に腰をかけてか



ら、「今の日本でもバレバレになって、傷だらけです」と言いました。この話を聞いたら、心が打たれました。

日本へのイメージがいつも侵略、アニメ、そして桜なんてかけらのことに留めました。でも、その歴史も日本の苦痛であると皆さんは思ったことがありますか。実は、国の行き方への心配、そして国民としてはどんな国の人でもおなじです。我々はよく被害者の身分で、日本が戦争に責任を負うと要求したとき、日本政府は日本国民への責任も負いませんでした。核漏洩や津波などの大惨事から、応急対策の速さと強さ、国民のいい質を表す一方、政府の不作為が明らかになりました。我々は「被害者」として勢い込んで日本人を責めた時、現在の日本が直面した難関に思いをやったことがありますか。

日本人が座るまでには、中国側の椅子がずっと空いていました。南京とかレイブ・オブ・ナンキンとかは中国人にとっても言い難い話題ですが、この日本人が中国人として日本側に遭った苦難を告訴しました。彼のおかげで、中国側はやっと胸にたまっている情緒を表現し始めました。自分の国の侵略歴史に直面して、乗り換えることなんて一体どんな勇気があるか、私はこの日本人の方に感心しました。

私が出たとき、膨大な無力感に包まれました。日本右翼らが歴史を抹殺した「教科書事件」に対して、日本政府は黙認の態度を表しました。中国民衆が日中戦争のせいで遭った苦難が、経済利益を前提としての「日中友好」で覆い隠されました。そのほかの辛さや不満も見られなくて、訴えませんでした。日中戦争に、中国は戦勝国でも、民衆の傷は癒されませんでした。彼らはただ「歴史の証」と見なされて、「人間」としての苦痛が感知されませんでした。だから、中国被害者が遭った遭難は二重です。

傷はただ政府が日本戦略軍の暴行を証明した証拠として示されました。民衆の恐れや不満が聞かれなくてからこそ、侵略者に対して溢れた恨みが示されました。知り合った中国人が日本の立場に立って発言しているとき、二つの思いが心に葛藤していました。一つは「君、どうしてそっちに立つのか」で、もう一つは「彼女はきっと自分なりの理由があるの。彼女はどうしても裏切りものにならなくて、彼を信じて」です。

翌日、彼女はまた全体に「私のことをうらきりものだと思いますか」としつつも

んしました。その一瞬、私はなお一層積然としました。そして、勇敢な彼女に感心しました。誤解を招きやすいと知っているが、平和や公正のために、お互いの理解を深くするために、勇気を出して、「敵」の陣営に行きました。今の中国にとって、そのような若者が必要ではありませんか。頭がよくて、勇気があって、またお互いの声を聞きたいです。

今回の対話によって、我々が要るのは日本人の謝りではないと思います。歴史は歴史で、現在のことではありません。何ととっても、侵略者、罪を犯した者は今の日本人ではありません。日本政府が事実を承認して、戦争の責任を負うというのは、我々の本当の要求です。角度の違いによって、日中双方が戦争への解釈は違ってかまいません。しかし、事実を承認するのは一番重要だと思います。

#### (七) 礼拝

長江の岸の燕子硯は南京事件の虐殺地点の一つです。資料によってここで虐殺された人数は5万人ですが、実際にはこれだけではありません。ここで日本の兵士に銃殺されたあと、長江に投げ込まれた人もいます。切符を持って、上がって行くこうとすると、隣で本を読んで朗々としている子供の声が入りました。「ここには小学校がありますか」私が聞きました。当地の人は「はい、そうです」と言いました。「公立学校ですか」「はい」と答えました。血が染み込んだこの土地で、子供たちの朗々としている声によって、希望がここにもたらされました。

#### (八) 対話 2

また椅子二台、陣営二つですが、中国に来て自国の歴史を求める友達に深い敬意をここで表したいです。それに、政府の方面にはたくさんの無力さがありますが、自分の身をもって、見たことあるいは感じたことを身の回りの人に伝えようとします。事実を分かる人の増加につれて、真実への理解も近づいていくと気づきました。

研究会を通して、疑問がとてはっきりしていた。どうして日本が何度も謝ったが、中国は受け付けないか。これを除いて平和のために日本はどんな努力が

期待させているか。日本の首相たちが歴史問題で中国に謝った、でも中国はこれがただ首相個人の意味を表して、日本の政府の態度ではないとおもう。「歴史教科書事件」はずっと日中関係の一つの焦点ことだ。中国の人民は日本政府が事実を否定していて、はっきりと歴史を改竄することに支持を与えると考える。

中国の人民の角度から日本政府が歴史を認めて欲しいが、政府の態度がまだすぐ変わられないけれども、自分の能力範囲内で、もっと人々が歴史の真実を了解させて、もう平和に尽力しようと思う。

私たち、歴史の本当の姿を新しく認識するべきで、「南京事件」にまだ皮相的な見解が持っているから。この研究会に参加してから、南京事件の経歴者、後代そして南京住民に向けての人文社会サービスとトラウマ治療が与えられなければならないと思う。教育、メディア、演劇でもっと人々が人類の角度からこの歴史を理解させて、そうすれば古傷から出てリアルな平和とか友好とか実現できる。

研究会の四日間で、日本の方々と一緒に働き、相談、歌い、演出して、距離が縮んで親切になっていた。私たちは一堂に会して、皆さんがただ同じ理想、平和のためにしたことだ。まとまりのない感想だが私は将来に向かっていく。

---

23

## 感想文

翁晓丹

時の流れが矢の如く。2009年の南京セミナーに行ってから二年間も経った。

再び南京に行くこと、迷いもなくすぐ決めた理由は、09年の南京セミナーで見た・聞いた・感じたものは2年間を経て、自分の中にどれくらい消化され、どのようなものになり、そして再び南京という土地で行うワークショップでどうなっていくのか、探りたかった。

そして、もう一つの理由は、南京セミナー自身がこれからどう成長していくのか、自分の目で確かめたかったのである。ドラマセラピーと表現アーツセラ

ピーは、中国では臨床心理学の関係する方もまだ馴染んでいない手法である。それにファシリテーターはアメリカ人と日本人だったということもあり、09年のセミナーでは、中国側はがんばってワークショップのやり方とその独特な雰囲気慣れようとする姿があったのが印象に残った。今年のワークショップはリピーターはいたが、ほとんど新しいメンバーであり、そしてドラマセラピーのほか、プレイバックシアターの手法もたくさん取り入れるということもあり、今年はどうなるのか、少しは懸念であった。

まず、南京大虐殺記念館に足を運ぶことがとても大事な準備だと私は思う。2年前セミナーの初日にメンバーと一緒に行ったが、今回ワークショップの前もう一回行きたかったけれど、諸事情で行けなかったのが残念な思いになった。史実を思い出すだけでなく、やはり記念館しかない雰囲気があって、ワークショップの前に行ったほうが、からだ全体がもっとよくワークショップに溶け込めると思う。

あと、ワークショップの前、プレイバックシアターを取り入れることを分かっていたが、初日いきなり見るときびっくりした自分がいた。自分の感情はまだその準備ができてなかったというところもあったかもしれない。慣れていくと、プレイバックシアターの方の表現力にとっても感心した。そしてワークショップが深くなっていくうちに、からだのどこかで満足できてない感じがあった。プレイバックシアターは、感情を共有するにはとても有効的な手法だと思うが、シアターのメンバー以外のみんなは目で見ていただけである。というのは、その感情を目から情報として受け取るだけであり、からだにはなにも残ってないと感じた。

二日目の朝ワークショップが始まる前に、何人かが「今の気持ち」を語ってもらい、その「気持ち」をプレイバックシアターに表現してもらった。ほかのメンバーの気持ちが表現してもらった場面を見て、その人が語ったものとシアターの方が表現したものは、違うものだと感じた。でも、本人は頷いて、「表現できた」と答えた。私の気持ちも表現してもらったが、やはり違うと思っていた。気持ちを語っている人、プレイバックシアターの芸術表現、その表現を見る人、この三方の間、どんな関係を築いてほしかったのか、このセッションの意図がどこにあるのか、よく分からなかった。

なんでもプレイバックシアターに表現してもらうより、下手だとしても、「自分のからだで表現してみたい！」という声はやはり自分の中にあった。

二回目なのに、南京セミナー自体がとても成長していると実感できた。一番嬉しく思ったのはリピーターたちとの再会であった。二年前のワークショップで体験したものはからだの内に覚えられているので、日常生活には少なくとも影響を与えていると分かった。互いのワークショップ後の経験を分ち合えたことによって、大きいな喜びを覚えた。

二年の間、いろいろ変化が起しているのは、リピーターの私たちだけではなく、中国国内もいろいろ変わってきていると分かった。物価の高騰、貧富の差の拡大、与党の社会信用の喪失などにより、草根による社会運動の動きが見える一方で、国民に不安を感じさせる社会要素も増えると見られる。この物質だけが重視されている厳しい社会現実の中で、心とからだで歴史を考える、歴史にいる「自分」との対話をテーマにする南京セミナーは、中国社会・日本社会へ発信・提案する社会運動になれると期待し始めた。どうやって継続していくべきなのか、これからの課題となるであろう。その継続になにかできることがあれば、微力ながら力を尽くしたいと思っている。